Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

813.6
I619g
Ref

十 國語雜詩選

813.6
I619g
Nx

帝国図書館蔵書

国立国会図書館
41.3.31

691326

増補雅言集覽卷之十

石川雅望 集
中島廣足 補

○登の部

とく 解。万よい。帶紐下紐糸繩髪又霜雪氷つら、なへり。ど又金鉄の湯よなるをもいへり **ときあらひきぬ** るど末よ出す（後拾）秋上、小左近「たゐばさよあさひく糸のみされつ、とくとやけふのくれをまつらん」上の句い疾トいひけんとてなれど糸の（夫）八能因やうよ心の打とくるとの意也 雨の方よていへばとうす意よて他なれど此。以上自ら也以下他より也の岩木のゐれる君ろも哥い金岩木よつきていへばとくる意あり（天智紀）廿「おみのこのやへのひも騰トグ矩ひとへだよいまさ藤柯ワカテバ爾波みこのひもとく（後撰）春上友則「水の面よあや吹みさる春風や池の氷をけふいとくらん **とく** い右のごとく自らとけぬるをも他よりとくをもいへり。動うーいへるよい自他の差別あり **とくる** **とけて** **とけー** **とけん** **とけゐん** **とけぎ** 又 **とけける** **とけけん** のさぐひ自ら也 **とき** **とて** **ときー** **とりん** **とりぎ** 又下知とてそのひすびの **とけ** 又 **とける** ときけるの約也是ら他より也

○ **とくる** くさぐまトへ出しつ但心の上よいへるい大方い自ら也朋友の交り男女の和熟するも又怨遺恨のさるゝも心オキナキ意也又物思ひのさるゝも氣ノユルミ打クツログ也。俗のごとく **打とけて** いへり他より也。自らとくるを **とける** などもとけるといへるい俗語也（夫）廿二能因「五月

雨ゝとくるまりねをみがきつゝてる日ゝみゆるまゝ鏡哉（後撰）冬「おら雪のふりむへてこそとゝぎらめとくるたよりをゝぐさゞらなん（詞花）戀上能因「心さへむすぶの神やつくりけんとくるけゝきも見えぬ君ゝか（後拾）戀一「くちゝはける袖のゝるゝゝ下紐のとくるゝあどゝおらせざりけん（かけろふ日記）上十一「くれども心のとくるよなきゝ

○とけん（後撰）戀三元方（伊勢物）「戀ゝとゝさらゝもいもゞ下ひものとけんを人ゝそれとゝらあん（拾）冬兼盛「ふゝつけゝ淀れゝさりをけさみれゞとけんでもなく氷ゝゝよけり（源をとめ）七物の心もえ侍らゞそのうらみゝおのづゝらとけ侍りなん敬せずゞ

とけあん　あどもい　ふべゝ

○とけゝ（新拾）戀五「夢ならで又もむもゞぬちぎりゝあとけゝ一夜れあゝの下ひも

○とけて（拾玉）七「山里れ軒のゝけひの薄氷とけても雪の下ゝあゝぬる（續後拾）戀三公雄「いもせ山中なる川のうゝ氷とけてぞいとゞ袖ゝぬれける

とけてあふ（續拾）戀三前關白「行末をかねてぞむすぶ下ひものとけてあふ夜れ中のちぎりゝ

とけてぬる（新葉）戀三光有「忘るゝあゝ新手枕の袖の霜とけてぬる夜ゝ又へゝさつゝとも

とけてねぬ（新古）冬、攝政太政大臣「かゝゝきれ袖の氷ゝむもゞ、きとけてねぬ夜の夢ぞみゞゝき

とけてねられぬ（源ゝゝ、き、）卅八君ゝとけてもねられ給ゝゝ（夫）卅一安法法師「舟路ゝとてとゝゆひの里ゝ宿とれゞとけてねられぬ波の音ゝあ（新葉）戀二經高母「思ひやれひとりかれやる黒髪れとけてねられぬ小夜の手枕

○とけゝ（拾）冬又戀三「霜のうへゝふる初雪の朝氷とけゝも物を思ふころ哉

とけぬ（續後拾）戀二後鳥羽院「あふ事ゝかゝむもゞびなる白糸れとけぬうらみゝ年ぞへゝける（新葉）戀三宗良親王「こよひとてねゝゆくをゝのちぎりゝふとけぬつゝら、ゝむもゞ、きつ、

○とけぬ　是ゝ畢ぬ也

とけぬる　ともい　ふべゝ（堀川）國信「とけぬらんゝゝねなりとも五月雨のあゝ、もみえぬそらのけゝきゝ

○とけなを（山家）「さらゝゝまゝむもゞゝ、れゆく心哉とけあゞとこそ思ひゝゝども

とけふゝ（新後撰）春上爲氏「里人ゝ山澤水のうゝ氷とけゝゝ日よりゝりなつみつ、

○とけゞゝき（源ゝ、き、）卅三「ゝゝりうるゝゝき御ありゝまのとけゞゝくもづゝゝけゝのみ思ひゝづまり給へるをトシテ打とけぬ意あり

○打とく（枕）二ノ廿七男女の事をいへる所ゝ恥などもゝる人ゝゝあらねど打とくべき心もへゝゝもあらぬゝ（抄隔心なる男あるべゝ）（同）十二ノ一打とくまゞき物、あゝと人ゝいもゝる、人さるゝよゝゝと

おられゝさるよりゝうらあくぞみゆる

打とけ（源うつせみ）五いよゝゝゝゝこりゝゝ打

とけて笑ひなどうゐるれゝ（同と、き、）卅三れとゞめさとり給ひて打とけ給へれば

○とけて　とけむ（万）九ノ廿二紐の緒解て家の如解てぞあそぶ帯ヒモヲトキテ家ニアルヤウニアソブ也（同）

二ノ廿二心も不解心ノムスボヽレテトケヌナリ

○とき　ときて　是ゝ他より也（万）十二ノ九「ふさりしてむすびし紐をひとりしてされゝ解みし

たゞゐあふ迄ゝ此歌の下ノ句（ゝせ物）卅七段よゝあひ見る迄ゝとゐゞとぞおもふ（かけろふ日記）中下十御車のあやう

ぞくときてみ隨身がらも皆みされ侍りぬといふときける（宇治拾）十三十二さとりゐな

して梢よしがりつけさり云々よりて繩をときけれゞときひろげ（盛衰）廿三ノ八段宿く

よりけいせいどもをむりへて帯ときひろげて歌よみ酒もりしてゐさりときくさも

（源手習）四十四髪ゝ尼君のみけづり給ふをこと人よ手ふれさせんもうさてれぞゆる

ゐてづりらむさえせぬ事なれゞさゞそこしときくさして云々

○とゞ（万）廿ノ六「さゞいもこゞもゐのびゐせよとつけしひも糸ゐなるともさゝ等

可自とよとゞで　とゞぬ（夫）八憲盛「とものづゐをとゞでいくゞゐなりぬらんなゞるの

浦の五月雨のころ（源とこ夏）初帯紐もとゞぬゐどよひきとく（同紅葉の賀）廿八中將

の帯をひきときてぬゞせ給へゞ云々補（万）五紐とときけてたちむしり（同）廿ノ四十一

むすびし紐のとくらくもへゝ

○とけて　解て。官ヨリ俗の役義を召ハナサレタルをゝふ（古）雑下左近將監とけて侍りける時ゐ云々（同）同

つゞさとけて侍りける時よめる（源關屋）四その弟の右近のそうとけて御供よ下り

しをぞとりわきてなし出給ひければ

とく　説。大方ゝ俗と同く説法の意よて佛經よゝへりされど。（源さまゞつゞらのゝ大夫の監よめのと

もと注解の意あれゞおべての書籍よもいふべし

の歌を先のとのむそめど（枕）七ノ九清範講師ゐてとく事どもいとかなしけれゞ云々

のりとく　法と　とくみのり　説御法（新古）釋教齊信「數ならぬ命ゝ何ゞをしゞらんのりと

くゐどを忍ぶもりりぞ（同）同慈圓「とくみのりきくの白露夜ゝれきてつとめてきえん

ことをしぞ思ふとき出（枕）二ノ十七説經師ゝ云々（同）十九いゞでかさりつさふもりりと

ときいでさるときゞりを　説て聞ゞ（源王葛）十二聞えひげめ給ふなめりやとときゝゞり

を（同ともゝきゝ）十七のりの師の世のことさりときゞりせん所のこゝちをるも　とゞぬ

（續後撰）釋教、京極前關白家肥後「元結の中なるのりけたまさゞふとゞぬ限ゝしる人ぞなき

○とゞを（源さゞき）卅二六十卷といふふみよみ給ひれゞつゞなき所くとゞせなどし

てれゝしまゝを云々。前の他より解意のとく　と動ゞしゝふ詞同

とく　德。德行道德の德よて行ひ又術藝を身よあし得たるをいふ（神代紀）下卅六よ德の字をイキホヒと點したる如く威德といへるも同く人よ敬せられ俗の身ニ威

ノッヶ意あをゝ次の富める意福分よいへるもゝとゝ同意也（うつゞ俊蔭）心と身をしづめしゞどゐことゐ身のと

くもなくてひさしくなりゐしゝまして一人のつゝひ人ものこらぬ日ゐたゞひてうせゐろびて（是もわが心カラよ身をしづめてあれば行ひもあらんをず人よも敬ハれぬ意也）**徳のたゝき**（同　藤原の君）若き時より國を治め位まさり徳のさゝくなるまでめもまうけぎ（盛衰）四十三末の段位の尊からざるをうれへぎして徳の尊からざるをうれふ祿のれびさゞしからざるをもぢぎして智のひろからざるをもづといへり云々

とくをあらもに（同）十六、あやめのまへの段上下男女歌の道をたしなまんもの尤かくこそ徳をゞあらもにべけれとれの〳〵感涙をおゞしけぎ（同）頭ハ猿せなゝハ虎尾ハ狐足ハ狸聲ハぬえありまことゐ希代のくせものなりまことゐ禽獣もかやうの徳をもつて君をなやまし奉る事のありけるよ

とく　徳。福分の意也　**とくある**（落くゐ）一時の受領ハ世ゐ徳ある物といへゞ（同）二少將の君ゐつき奉りて右馬の丞ゐなりさるゐゐゝの人の徳あるきぬ五十参らせたれゞ句（宇治拾）四十ノ大殿の下家司のいさゞくとくあるゞ妻ゐありてよろづ事ゝなひてぞありける**とくいゝめしき**（源東や）三とくいゝめしうゐどあれゞ常陸守の富めるをいふ**徳ある**を今ハ音よ有徳といへり

○**とくゐん**　徳人。富める人俗の長者福者をいふ（宇治拾）七ノ十八それより打ハゞめ風の吹つくるやうゐ徳つきていさゝき徳人よてぞありける云々此**とくつく**といへるも福の身よッの徳ありの意よて俗と同く損徳**徳人**　**とくゐゐてり**（盛衰）卅三初段大太夫といふ徳人あり一人の娘あり云々れなゞゐどなるものの格式の同しほどある也聟ゐならんといふそゞ徳ゐてこりもちるぎ云々

大徳人　そくれて富る故大の字をそへたる也（平治）中長田ハ大徳人よて世を伺ふ者おれゞ**下臈徳人**（盛衰）三一ノ段右中將家繼といふ人云々げらふ徳人の聟よなりて云々**下司徳人**（宇治拾）三八ノ此山のふもとよいさゞきけぎ徳人ありてこれらいやしく富めるをいふ

とく　徳。恩徳の徳よて俚言のカ古く御ゝげといへるよ類語ゐ也御とくハオカゲ也。きど用ゐざまいさゝゝ異也　**とく見る**（枕）八ノ十七宰相の中將のとく見る事句そゐさよむゝひてをゝむべしゐどいふ**御徳を見る**（同）十ノ十巫女詞其人々めしさりけれどゐるしゐゝりけれゞ今よれんゐ嫗也中年の女の自稱ゐハ也印本女の字をゝけるハゐろし女のゝなハをんな也をんめぎを御とくを見る事ゐどかさるゐをゝしカゲカウムル、オカケチカウムル也間のを文字ハ添へもしそへずよもいふべし**とくゐ**（宇治拾）二ノ廿五さしぬきのくゝりのとくよ希有ケウの命をこそいきたりけれ指貫のくゝりわりし故そのカゲデなり（同）七ノ七郡司もよしゐき人をあハれみれきて其とくよいもてハ勘當かうふるゐこそあゐあれゞへニなる意其人のカゲデ也**御徳ゐ**オカゲデ、オカゲデモッテ也（大和物）四御ちゝしゐをしかし給ハん云々御とくよ年でろ孫さきもの打殺しゝ侍りぬ（うつゐ俊蔭）あてこそのゝとくよ面白うめでさ死物をも聞つるゝ

な補(源すま)此御いさもりよか、らぬ人おく御とくをよろこもぬやいあり〜(大和)つゝふ人などもとくある所ゐいきつ、(著聞)十六ノ三今いとくつき給ひおん(月詣)雜經盛「やそぢをも何ゝ久〜とれもふべき神のいまさんとくとこそおれ○濵臣云德の字音を哥ゐよめるいに日本紀竟宴哥ゐ於保美度求比呂邇波須女良と有て大御德廣庭天皇の義なりさてこ、いに德ゑ疾といひゝけ〜ゝ(源行幸)三十つまこゑのやうゐて御とくをもかうふり侍らん(宇治拾)一ノ二客人殿の御とくまいもかゆくひつといひあへり

[とく] 疾。早く。歌ゑ解をゝねてよめる前ゑ出そ本語の也

[とー] 別ゑ出す [とき] こーの所。ゑ附す [とく] 聰敏の事ゑもいふべー [とー] 敏も末ゑ出す

(雄畧紀)廿一登レ樓疾走レ(源タゝゐ)十二いゝゞそべきとて手をとらへ給へれゞいとおれてとく歌云々(落くゐ)四此月つでもりゐくさるべーれおゞくいとくとの給ひき(拾)二戀爲基「日のうちゑ物をふさ、び思ふ哉とくあけぬるとれそくいるゝと(源をゝ紫)廿九とく參り給ふべき御使ゑ忘れど(枕)四ノ十いととくかへり來り(うつゐ樓の上)上四十とくまゝりて聞ゝせ侍らんと申ゑ(源こてふ)廿三又のあーさ御文とくあり(同ゑ、き、)四十八人とく〜づめて(枕)八ノ十一人の哥のゝへ〜とくをべきをえよこえぬゐどいと心もとおー

○[とくゆゝー き](枕)八ノ十とくゆゝー き物、人の子うみさる男女とくきゝまゐー云々

除目のまさつとめて必おる人のおるべき折もきゝまゐー、思ふ人のれこせさる文(源やとり木)廿五猶まさとくゆゝー き方の心いかれもたちそひ給へるい御心ざーのれろゝゑもあらぬなめりゝー

○[とく〜](源うき舟)六十八猶とく〜參りおんといひさをゲー て(枕)一ノ廿一とくかきて參らせ給へ云々とく〜たゞ思ひめぐらさで云々とせめさせ給ふゑ[とう]音便也同意ゑて子細おー(源竹川)卅五とう參り給ふべきよーのみあれゞ(同椎ゝもと)四旅寐のやどりい云々いととうあけぬるこ、ちー て補(月詣)勝命法師「からころもをでうつつちのとく〜と山びてさへもいそぐおるゝお(濵臣云)擣衣の音のとく〜とひゞくを疾々の意ゑいひよせさりされゞこそ山彦さへもいそぐといつゞけされ(枕)六ノ九とのもつゝさいとく〜といふげゑれそくさへあらんい

[とぐ] 磨、研(万)廿五十一「つるぎだちいよ、刀具べーいゐ〜へゆさやけくれひてきゑー その名ぞ(字鏡)研止支彌加久砥止々久[とぎ][とぎみがく](宇治拾)十ノ十一いらなき太刀をみがき刀そとぎ劔をまうけつ、云々日でろとぎみゲきつる太刀刀云々

○[とげる](新六帖)五知家「今いされまろいゑとげるこ〜刀世ゑつゝもれぬ身とぞおりゑー(万)四ノ四十三「まそゝゞみ磨ー心をゆるー てい云々(同)十三廿九つるぎ太刀とぎー

心を云々是ら鏡又い劔よりけていへり。磨い[とがを][とがる]遂い[とげさを][とげらる]むげまーつとむる意也とぞ

あどいふべー動ろーいふ詞異也 補（小大君）「とぎれたるーさやのかさなもさびよけりさーて久ーくやどやへぬらん（うつを 蔵開）上ノ一二十六めをとぎてみあまもり給ふ（堀百）初「卯花も神のひもろぎとぎてけりとふさもさよゆふりけてみゆ（宗祇云）ヒセロキい神よタムクル飯也 此とぎい米をとぐ也

[とぐ] 遂。本意志をとぐる（万）七ノ卅八わが思ふ心不遂（トゲズ）と思もめ[とぐる][とげて][とげー]

あどいふべー[とげる]といいふべらら也[とげ]（源 名合）三その御心さーをもとげ給ふべきやどよ（同桐壺）三十たゞ此人の宮づかへのやい必とげさせ奉れ（著聞）廿一ノ後生のつとめをもげみてつひよ往生をとげよけり[もみとげ]住遂（後拾）雜六、釋教小弁「常ならぬよゲ身い水の月なれゞ世よもみとげん事もおやえに 補（万）三、五十九長哥れもへりー心いとげぎ（公任）「世中い水よやどれる月かれやもみとぐべくもあらにもあるらな（源 ゆうな）上卅わざとーもおやーとげぎなりよーを

[どく] 毒（催馬樂）手をとりふれそやかをまさるかよやどくまさるかよや（盛衰）十一段 陰山の烏其流れをあぶる時水らへつて毒と變ぎといへり[どくやく]（同）十七、十眼（マナコ）三段よ毒藥を入れて目をつぶーて云々[どくのや]毒の矢（盛衰）卅四、六段 かあーいらなや邪見の毒の矢忍辱（ニンニク）の衣をやぶる事云々[どくちう]毒虫（宇治拾）三ノ廿六七八のひさでよりそこらの毒虫とも出て子どもをもさーくひ女をばさーー殺ーてけり

[とくい] 得意。懇志の友をいふ（列子）の字也（源 あらーー）九さらひ侍りつれど云々（今物語）九待賢門院の堀川上西門院の兵衛をとくいありけりとくいども（榮 若枝）五おの〳〵とくいどもいそのつぎねーよいきつゝぞゐさりける[とくいの人]（宇治拾）五ノ十一このとくいの人々四五人もりきあつまりよける

御[とくい]（枕）四ノ廿二、公食の尼の事をあれいらで見侍らん必見せさせ給へ御とくいあゝ[とくい]（同）六ノ五、后の父君闘かいあゝ[とくい]（同）六ノ五、后の父君闘か白詞、清をさーて更よよもかさらひとらゞおど笑ふ[古きとくい]（同）七ノ十齋信詞 れいふるきとくいをいとわくげおる娘どももちさりともこそ見侍れとの給ふ（同）

[とくい]（躬恆集）下ノ卅三 もとよりのとくいのうとくてやむいなー是も清をさす[もとよりの]ーてつらいをとくいとる（盛衰）十八ノ四段文覺詞 入道出家の後いへつらふ心おけれゞとくいとる事もおークル意あり 補（躬恆）もとよりのとくいよ侍りけれゞ（枕）四、三十六御とくいおゝりさらわもかさらひとらゞおどわらふ

[とくよん] 徳人 [とく]の所 [とぐち] 戸口 [と]戸の所よ附す

とぐら　塒（和名）十八十二孫愐切韻云鳥巣在穴曰窠在樹曰巣訓須一云須久不宇垣栖雞曰塒和名止久良。かくあれど雞のミあらぢ鷹又飼養いぬ諸鳥ゐいへり。こもきる巣をいふ（六帖）六下「あけぬとて何いそぐらんひお鳥のまさとぐらなる聲ゐやいあらぬ（万）二ノ廿九「鳥垣立かひしかりの子をさちおびまゆみのをゐゐとびゐへりこね　畧解云垣い栖の誤りゐ（同）十九ノ下長哥鳥座ゆひをゐてぞ我飼ましらふの鷹（うつを國讓）上七十一「鳥のゐるおおゝとぐらいとひしゐどふるをを見てぞとめぎおりゐし（同梅の花笠）「枝でとゐいもせつらぬる鶯のとぐらをせを　みゐ花ぞちりける（拾）雜春亭子院云々弓御覽ゝてかけ物出させ給ひけるゐひげこゐ花をこきいれて櫻をとぐらゐして山菅を鶯ゐむをびをゐて云々（同）雜賀、ある人の產夜元輔「松ゐえれこのよへる枝をとぐらゐてをさてらるべき鶴のひあゐあ補（能宣集）人の屏風ゐことりのをゐこゐ「さはしゐ山れふるをいこふらめどこのとぐらゐいかひて侍るゐゐを書て侍る　おく聲もせぬ

とくさ　木賊（和名）十五、膠漆具十二木賊度久散（枕）三ノ廿六草い、とくさといふ物い風ゐふゐれたらん音こそいゐおらんと思ひやられてをゐしけれ（盛衰）一ノ三段播磨米ヨネいとくさゐ椋ノの葉ゐ人のきらをつくるいとぞもやしさりける補（續千）物名、とくさむくの葉（宇治拾）十四とくさのかりぎぬゐあを袴きたるゐ（新續古）誹諧、三條院女藏人左近「しあの、やとくさゐおけるゐら露いみゐける玉と見ゆるおりけり

どくきのや（袖中抄）廿顯昭云どくきの矢といい奥のえびをい鳥の羽のくきゐ附子といふ毒をぬりてよろひのあき間をむりて射るといへり附子矢といふい是おり（顯輔集）忍戀「あさましや千島れえぞのつくるあるどくきのやこそひまいもるあれ

とぐひ　竹をそぎたるさき（盛衰）八ノ二人い竹の林ゐもしり入りて竹のとぐひゐつをいふおるべし　らぬられてうせふけを

とくせん　得選。下ざまの官の名也女（江次第）得選、廚子所、女官於采女、中選其人、故得名（禁秘抄）上ノ廿二下藹又傳之云々得選又傳之（同）下六得選三人也又髮上采女兼之云々凡於車寄乘車、女房近代例也況得選不可然事也行幸走内侍同車之時聽之近代事也（枕）十ノ廿七こいおどてかくいおくれさせ給へる今いとくせんをのせんとしつるゐ云々のりぬその次ゐいまことゐみづしゐ車ゐあれば火もいとくらきを笑ひて云々

とやかくや　とりく　の所ゐ附を

とや　鳥屋。鷹のそみ所をいふ（好忠）八月中「とや見れば夏飼のかさりへり秋きゐけりと尾羽ぞしなへる（夫）廿七輔親「あまとしとやふむ鷹いましろゐてかさの、草れしもまこそふれ

○とやりへる　鳥屋より毛のかもるをいふとぞ　とりへるの所の注合せ見るべし（後拾）冬長家「とやりへるたらふの鷹のこゑをのみ雪げのそらわあいせつる哉（夫）十八、堀川院御時百首權僧正永縁「とやりへるたかれけ鷹を手わゝをゝてきゞをゝくゝるかゝ野へぞゆく（同）十四、衣笠内大臣「とやかへる鷹を手わゝをゝあもづの、鶉からんとこの日くらしつ　とやりへり（後拾）秋上、大江公資「とやりへりとりゝゞ手おらし、もし鷹のくると聞ゆる鈴虫のこゑ（金）冬俊頼「もし鷹をとりゝふ澤ゝかげみれバわゞ身もともわとやりへりけゝ（夫）廿七、侍賢門院安藝長哥「もし鷹の云々あもれうき世をゝてやらでとやりへりぬるをき繩のたゞ一筋ゝ云々　補（金）冬俊頼「もし鷹を云々顯昭云とりゝふとゝ鷹のとりゝる雉の片胸をとりて水邊ゝてあらひて鷹ゝりふをゝ取飼と云也ゝゞ身もともゝとやりへりをとゝ鷹の鳥屋ゝて毛の白くゝもるをゞとやりへりといふおりわゞ白髮の澤水ゝうつれるをもとやりへりしゝりとよめる也（續古）戀一中務卿親王「みちのくれたのぶれゝりのとやでもりかりゝもしらゞおもふ心ゝ（万代）戀一俊平「とやでめて思ふもくるしはしゝりのこひしとたゞゝいひや出まし

○とやで　鳥屋出（夫）廿七、衣笠内大臣「いりゝゝせんとやでの鷹のあふことゝもまれゝるこひゝか、りそめてゝ（同）十八、小侍從「くれぬとも初とやだしのもし鷹を一よりいのゞあもせざるべき　とやさし　鳥屋出し（同）十一俊成「もつ鷹のもつとやだしの秋風ゝまさきゝをれぬのらのゝるかや

とやま　外山。奥山ゝむりへてもあるをいへる也（古）廿、神樂哥「みやまゝいあられふるらしと山ゝるまされのかづら色つきゝけゝ（拾玉）六「誰りきてあもれといもんりづらきやとやはゝゝさわもとふ人ゝゝ（同）七「みよしの、れくゆりしくも思ふりゝとやまいあさき初雪の庭　とやまのそそ（新古）夏、西行「わとゝ、ぎれふりれ峯より出ゝけりとやまのそそわ聲のおちくる　補門山　眞淵翁（續古）雜上、僧正行意「とやまゝてよしれ、おくをれもふりゝゝみゆきふるらし時雨ふる也

とま　苫（和名）十一、三船類、爾雅注云苫和名度万編菅茅以覆屋也此（和名）の意ゝて今と同。あべての賤りの家、又舟ゝどもべてのりそめゝるヤヲをいふ（後撰）秋中天智天皇「秋の田のりわれ庵のとまをあらみゝゞ衣手ゝ露ゝぬれつ、（月清）「あきの夜れあもれもふりき磯寐りゝ苫もる雨の音をりて（千）夏仲正「五月雨ゝとまのしづくゝ袖ぬれてあなしわとけ（季吟本）の波のうきねや　とまでし（夫）十二、衣笠内大臣「山田もる木曾のふせやのとまでしゝ又袖ぬらを秋のむら雨（同）廿六良清「舟とむるとしまゞ磯の山れろしちるもみちをやとまのうもふきむら雨（同）廿六良清「舟とむるとしまゞ磯の山れろしちるもみちをやとまのうもふきもうちふれたれゞ月のこりゝくさし入さるゝ

補（更級日記）とまといふものひとへゝうちふれたれゞ月のこりゝくさし入さるゝ

（續古）信實旅「しをりせよとまのうもぶきひま見えてうきねのまくらあけぬ此夜ハ

とまや　苫屋　あまのとまや（後撰）雜二「物思ふと行てもみねばたゝかさのあまのとま

やハくちやしぬらん　きしのとまや（夫）卅五、寄傀儡戀爲家「大井川きしのとまやの竹柱うゝ

りしふしや限りありけん　おぎさのとまや（源あゝし）十興をさゝをべきおぎさのと

まや云々　とまのや（夫）卅西行「とまのやゝ浪立よらぬけしきよてあまげすみうきを

どハみえよき　とまやこのゝ　右ゝ（同）廿三俊成卿女「霰ふる田簑の島のとまやかさ名よハさ

むらぎもらふ袖哉（爲家卿千首）「よせこのへり浪うつ舟のとまやこのゝうれねハ夢も

えやハみえける　補（新後撰）旅、順德院「とまやこのゝ枕おげきぬうきねよハ夢やハみゆる

あらき濵風（新拾）夏、法印定圓「さみされのふる江のむらのとまやこのゝ軒までかゝる田

子のうらおみ（新續古）旅仲綱「とまやゝさををされあゝをこよひゝおゝ海士のゝるも

をひをきものよて（月詣）旅隆信「玉つしまいその浦やのとまやゝさゆめたよ見えぬ

おみのれとゝお（同）五月重仲「とまやゝさてらしをゝさるハひこぞしのつまむゝへぶね

こぐゝとぞみる（山家）下「いそをよる浪ふこゝろのあらむれてねざめげちおゝると

まやゝたゝお（長方集）「まろねをるをしまの崎のとまやゝたもくをげ上よ雪もし

きけり（拾愚）上「むま松のねられぬ浪のとまやゝた猶聲ゝふるさよちどりゝお

とまびさし　苫庇（夫）卅、後鳥羽院「紀の國やあまのふせやのとまびさし吹上の千鳥月よお

くおり（同）卅五爲家「ゝりそめのをハさの里のとまびさしとまらぬ袖の露をみせばや

補（新拾）秋下定家「あれよけりしをくむあはのとはびさししづくも袖も月やどるまで

とまる　留止。又泊の字を訓り次のくさ〳〵皆同意おれ　とゞまる　と大方同ド、てらしるべし

ゞ動ゝいふ詞かよハしいふべし前の

とはる　是ハ物の殘り。人の上よも、旅さゞぬをも、留主をるをも、又いづくよもあをとゞ

とゞまる意也。まり居るをいふ、世よおげらへ生のこり居るをもいへり、涙、又血

などよいへるも、又行く水、春秋の過るをとまらぬといへるも皆同意也（六帖）四人の心をいゝゞさのまん「あみのめよ吹

くる風ハとまるとも「行水よふりくる雪ハとまるとも（後撰）別離「わのれゆく道の雲

井よおりゆけゞとまる心もそらゐてこそおれ（かけろふ日記）上ノ下一此度より遠く物し

ぬべき事のあるを（同）三いといみゞと思ひさりとまるハ更よもいむぞ（同）中ノ中廿三寺

ごもりより　よし〳〵ゝくけゞらひたれゞとまるべきよもあらぞ　云々（後撰）哀傷伊勢「不

歸る所よ

どもおく誰もおくれぬ世なれどもとまるハゆくをゝおしとぞみる

○とまりて（源と、き、）廿さうゞみハおしさるべき女房どもゞゝりとまりて親の家

よ此よさりなんわさりぬる（同桐壺）十今までとまり侍るゞいとうきを　云々、生のこる意也

（同そま）四十三人のそねみおゝくてうせ給ひよしゝど此君のとまり給へるいとめで

たし（狹）四ノ下五十二おゝらん後よ此とまり給ハん宮たちをとふらハせ給ハんのみこそ　云々

とまれ（安法集）つくゝまくたる人おもやくの哥こひ給へる人まで「とまれどもいきの松原おもひやるとたゝまのみもかげむべき哉 とまらん（後撰）春下中務「千代ふべきこのめまさせれど櫻花とまらん事ゝ常まやゝあらぬ

○とまらぬ（後撰）春上「人心うさこそまされ春さてゞとまらぬきゆるゆたりくれなん行まきえのこら（保元物語）中ノ十五血もさらまとはらぬゝて白青の御狩衣あけまそぬ雪をゝねたり

まるゞりゝかり とまらぬ（續古）哀傷紫式部「あり〳〵世を夢まそかゝて涙さへとまらぬ宿ぞりかゝりける 涙のとゞまらぬまそ生のこらぬをゝねたり（拾遺愚草）下「もや瀬川そかさりまきゆく波のとまらぬ秋を何を〳〵むらん

とまる 立とまる也 とまりて（枕）五ノ十五簾のもとまとまりてそるこそ飛も出ぬべきこゝちすれ とまれ（宇治拾）十一十四あのをぐる人まりとまれきんたちのおゝ〳〵まれぞ 云々

まかりゝ添へていへる也 たちとまる た の部まで出を

とまる 泊の字の意まて舟路まも又常の家まやどるをもいへり（土佐日記）こよひうらとまとまる（後撰）戀四「流きまる瀬〳〵の白波あさけれゞとまるいなふねりへるおるべ〳〵 とまりさり（枕）十二十四

わりおく夜ふけてとまりたりとを（源末つむ）卅三御とのゐ所まやげてとまり給ひぬるやうまて とまれり（土佐日記）大そなとまとまれり（玉）旅伊勢「草枕露はりりまや

ぬれまけんとまれる袖ゝ〳〵ぞり〳〵物を とまらん（源そゝきゝ）廿二大納言の家ままりりとまらんとをるま 補（新後撰）旅、後九條内大臣「さきたちてたれり草葉をむをびけんとまるはくらまのこるをら露

とまり 休の語也（和名）十ノ十五唐韻云泊、止也和名、度末利坤元錄云雍州有二百頃泊一岐州有二荷池泊 今案播磨國大輪田泊此類也（土佐日記）元日猶おゞとまりおり（拾玉）六「おひ風おそままりせつゝゆく舟のとまり定めぬうらめ〳〵の世や（夫）卅六、海路爲相「いそげとも猶山こえぬ波の上の雲をとまりとむりふ舟人（今物語）十二後白川院の御時日吉社まで御幸ありて一夜御とまりありて次の日御下向ありけるま とまりする（拾）戀五景明「風をいさみ思ゝぬりさまとまりをるあまの小舟もりくやさぶらん とまり舟（新六帖）三、衣笠内大臣「湊江まりゝふりさつる泊り舟おげる、迄まゝ〳〵ゝゝちきぬ 補（万）十五ノ九「あをまよゝおらのゝやこまゆく人もげも草まくらたび行舟のとまりつけむま（同）九ノ十六さげ舟もてんとまりゝらぬも（金）雜上家經「ゆく人をたちぞさづらふたりもりのわさりやさびのとまりおるらん

とまる 是ゝとぢむと類語まてもつる意也（うつを 俊蔭）色好そのもてゝりくぞあるやあやゝき物まとまるとゝなどめやをりらぬ聞えける

○**とまり** 体の詞也とぢめと同く、物のはてシマヒの意也（源さゝき）十七聞えさせつるやうよりさちなどいとまをよも侍らざりしかばわりきをどのそきでゝちゐゝ此人をとまりよとも思ひとゞめ侍らぢ（濵松）四思ふさまならん人をだよ見つけさらばそれよやゲてさゲ世のとまりよさだめてうできなくなんなど思ひつゝ、**春のとまり**（忠見）一「霞さつよ一の、山をこえくれば禁ゝ春ゝとまりありけり（千）春下崇德院「花ゝねよ鳥ゝふるすよりへるなり春のとまりをなる人ぞあき**秋のとまり**（古）秋下貫之「年でとよもみぢばあゲす立田川さゐとや秋のとまりなるらん（賴基）廿八「もゝぢばのなゲれうづまく淵をこそくれ行秋のとまりといそれ歌よい旅泊よあけてよめり

とまる 是ぢ今もいへる目ニトマル目ガトマル耳ニトマル心ノトマルあどのとまる也耳目心共ゐに文字の文字添へても添ずもいふべし**心とまる**（源箒木）八あやしく心とまるこざなべき（同若紫）十九山水よ心とまり侍りぬれど（同あのし）十八いとなつかしうひきなら一さるも御心とまりて（永久）ひさち「峯つゞき花よ心のとまりつゝゆきもやられぢ志賀の山越**目とまる**（源夕顔）十一目とまるべきふくゝへなど一て（同）八ゆきゝよ御目とまり給ひけり**耳とまる**（同さゝき）十よきあ一き事の目よも耳よもとまるありさまを

とまる 是ゝ停止の意ゐて俗のヤメニナリタル也**とまりて**（源鈴虫）十内のお前よこよひゝ月の宴あるべりつるをとまりてさうゞ一りつるよ（同浮ふね）卅りしこゐゝ石山もとまりていとつれゞ一ゐり（枕）五ノ十七くちを一き物いとゐみいつ一りと思ひさる事のさゝる事出來て俄よとまりさる**補**（後拾）春上、堀川右大臣「とまりよ一子日ゝ松をけふよりゝひりぬさめ一よひりるべきりゐ

とまらぬこま ひま行駒よ同、光陰の過行をゝふ（拾遺愚草）中「いりゐせんもてゐき人ゝ世よもゐ一とまらぬ駒のりげゝをぐめり

とけ 解 **とげ** 遂。是らとくとぐの所ゐ出を

補 **とげゐき**（竹取）云々かくや姫あひ給ゝぢといひければ是をきゝてぞとげなきものをばあへゐ一といいひける（六帖）「うきてぬるかもの上毛よおく霜の心とげなき世をもふるかな此とげゝ利氣ゐて利ゝ心利の利也心のとき氣もゐきよし也と竹取物語解ゐいへり

とふ 問。動りしいへる詞（源さゝき）四それりかれりゐどとふ中よ（同よもきふ）十九次の訪と同例也よりてこわづくをば云々かれゝたれぞ何人ぞととふ（風雅）雜下惟方「いふよりもいゝで思ふゝまさるとてとゝぬもとふゐおとりやもせ一**ともば**（續後撰）賀、三條右大臣「たゲためよゐゲき冬まで匂ふらんともば千とせと君ぞてさへん（新勅）春下國信「花さりぬ外山の谷ぢ里人よともば春をいりふくらすと**ともま一**（千）賀、八條太政大臣「千早ふる

神代のことも人あらバといまゝ物をおらら菊の花　ともまゐゝ（源うそ雲）廿六ともまは
ゝうおゞゝめせど　ともぎゞさり　是いともの順ゝ己ゝかあゝ出そ　道とへバ（履中紀）二おゐさかゝあ
ふやをとめを瀰知度沛麼　どもす　ともする　ともせ　令ゝ問也（枕）二ノ一人出ゝてといすゝ
るゝ（源夕顔）八知りて侍るものよびてといせ侍りゝかど　とへ　とへど（古）そいろいろせい
「山吹の花色衣ぬゝやゝれとへどこゝへぞ口あゝゝゝて
○とひ（源夕顔）四十五さる人やととひ給ふ（千）神祇右大臣「ふりゝける松物いもゞとひ
てまゝむらゝもかくや住のえれ月　とひでと（いせ物）卅六段忘れぬるあめりととひで
とする女のもとゝいひおとあどゝ同のるべし　とひ出（源夢の浮橋）七ゐの聞てかく迄もとひいで
給へる事あれど　とひきく（同末摘）三あもれの事やとてとひき、給ふ　とひあいす
（同桐壺）十一いかゝすべきゝざゝゝろともとひあもすべき人たゝあきを　とひさす（蜻蛉
日記）上八下人のきかんもうゝて物ぐるゐゝけれバとひさゝて　とひ見る（拾）戀四「われ
やうき人やつらきと千もやふる神てふ神ゝとひ見てゝ哉　とひさづぬ（源手ならひ）
廿六打つけゝとひ尋ねんも云々
とふ　是も物を万問ふ意也占とふ（拾玉）一「ゐざめするゝいの埋火かきのけてとふ
ゆふゆとふなどもいへゝ
もひうらもうき身なりけり（源あふひ）十一髮ろけふいゝよき日ならんゝゝとて暦の
ぎの所ゝけふいゝよき日ならんゝゝとて暦の

もゝせめゝて時ともせあど〜給ふゐどゐ
とふ　是も拷問推問の意ゝ（盛衰）十四六段賊徒ゝ行向ひもつて其罪をとふべきあり　ともれ
て罪を尋ね問ふ也
ともるゝ（うつゐ　さゝころ）せめてシヒテの意也といる、物ならバ云々といへとの給へバ
（宇治拾）十四舎人をめゝてともれけれバもゝめゝあらがひけれども云々其後大納言
もといれあど〜て事あらいれての後あん流されける
とふ　訪。是いゝ俗ゝトヒオトヅレといへるゝ同く人のもとへもわが方へも自身ゝても文
よてもおとづをミマフ意也次のとふらふゝ同意也もとの意いゝ問と同意あれバ
ともん　とへる　など動かゝいへる詞大方同ゞそれか中かゝ（後撰）夏「つれ〜〜となゝ
いゝふべからざるもあり味ひてゝるべゝ
がむるそらのゐと、ぎゝとふゝつけてぞねいあゝれける（古）秋下「秋いきぬもそぢ
いやどゐふりゝきぬそちふみゝけてとふ人いあゝ　ともる　ともるゝ　ともき　ともん
ともゝ　所ゝ訪也（新後撰）戀四公顯「もゝあくも人の心をまだゝらでともるべき身と思ひ
ける哉（新古）雜中西行「山里いゝ人ゝさせゞと思いねどともるゝ、事ぞうとくありゆく
（新續古）雜中爲藤「さびゝとも思ひけるかな山里いゝともれんとてのすゝりならぬゝ（續
千）戀四宗行「夏引の手引の糸れゝくらいゝゝとともれゝ中ぞ今いゝさえぬる　ともれぬ（後撰）
戀三「思いんとたのめゝ人いかもらゞをとともれぬゝれやあらぬあるらん是い訪いをざる也畢ぬゝも
ともれぬ　ともれぬる　おどい　ふべゝ

○とへ（後拾）雜二實方「さりあーや身い九重の内ながらとへと人のうらむべーやい

○ともぜ　ともざる　ともぬ　ともで（壬生）上「雨の夜もたのめー物を月まだふともぜおりゆく人の心よ（惠慶）「ともざりー人もとふべくわが宿の花のさりをそぐさぜもげか（いせ物）十三段「むさーー鐙さすがまりけてたのむまいともぬもつらーとふもうるさー（源夕顔）四十七「ともぬをもあどりとともでゐどふるま云々

○とひ（神代紀）下ノ十五訪之（トヒタマフ）（りけりふ日記）中四「おいーのりんのとのよりとひ給へるりへりでとま云々。　とひける　とひー（あどさまいふべー）　とひく　とひくる（拾玉）五「さーの山さえまー道をふみさけてとひくべき人と誰りーりけん（新勅）雜四行能「布引の瀧れ白糸さくらいまとひくる人もいく世へぬらん　とひとふらふ（是いたゞ同意の詞をりさねていへる也）（かけろふ日記）中中廿五とひとふらいぬ人ありともゆめまつらく思ふべきならねば

とふ（なき跡をトヒトフフ也）（詞花）雜下人の四十九日の誦經文まりきつけゝる「人をとふ鐘れこゑこそあもれおれいつりさげ身まおらんとすらん（新拾）哀傷法印榮運「あきあとの三十あまりの三とせ迄とふまぞ老のうさも忘るゝ　あととふ　あの部ま出も

とぶ（飛）（宇治拾）三廿四、雀の所ま飼ふゐどまとぶゐどまありまけり云々あいれとびていぬるよ　とびて　とびー（あどくさふべきこと勿論也）くまん（古）秋上「白雲まもねうちりもーとぶ雁の數さへこゆる秋のよれ月（同）一戀「とぶ鳥のこゑもきこえぬおくやまのふりきこゝろを人いおらおん　とぶやうま（落くゐ）二、北方の姫君のぞれ出給ふ所ま（源明石）十例の風出來てとぶやうまありーまつき給ひぬ　とぶげでとく（土佐日記）上もねといふ所まきぬわら歌「まことまて名まきく所もねおらばとぶげでとくま都へもげか

○ともを（令レス飛）　ともする　ともせて（宇治拾）十三廿三さげ鉢を飛せやりて云々鉢をとばせて云々鉢を飛する事い云々語脈右のおとくまて　ともせん　ともせー（おど動りー但いふべー）（同）右の所ま水瓶をとばーて（同）八ノ五鉢をとばーなどあり。ともさんとばー、おどもこ樣まもいふべくや

○とばぬ（宇治拾）三ノ廿六石をとりてもーやとてうてば云々おのづりら打あてられてえとばぬあり

○とび　とび出（枕）五ノ十五見をまゞき人の文を引とりて云々おひてゆけど簾のもとまとまりて見るこそとびも出ぬべきて、ちすれ（宇治拾）十三十一逃おんとおもひて人目をもりりてとび出て逃もーるとびさつ（古）ないり貞文「春の野のーげき草葉のつまこひまとびさつれゝのそろ、とぞおく（後撰）雜一庶明「いまーへもちぎりてけりお打もぶきとびさちぬべー天の羽衣（枕）七ノ三さて打わさらせ給ふを見奉らせ給ふらん

女院の御心思ひやり参らするゝとびたちぬべくこそ覺えーゝ[とびゆく](同)一ノ鳥のねどころへゆくとて三つ四つ二つおどとびゆくさへあゝれおり(濵松)二只今も鳥まおりてかの世まとびゆきて高陽縣まに参らまゐーき事かぎりなー[とび來る](枕)七廿臨時祭の所まざえのをのこどもめーてとびきたるも人長の心よげさあどこそいとけれ[とびありく](同)一五鳥虫のひさひつきいとうつくーうてとびありくいとをゝしー(同)二八ノ蚊の不そ聲まおのりて顔のもとまとびありく羽風さへ云々[とびゝふ](土佐日記)枝でとまる鶴をとびゝふ(月清)「わが宿の春の花園をるさびまとびゝふ蝶の人おれまけり[とびちがふ](かけろふ日記)末「とびちがふ鳥のつもさをいゝおれば云々(枕)二七ノまくき物、鳥の集りてとびちがひあきさる云々(同)一やそも猶螢とびちがひさる[とびあがる](いせ物)四十五段不さるたゝくとびあがる[とびさる](拾)神樂歌「たゝあが鳥ゐおのふーー原飛さる鴨のもねおとれもーろき哉(同)夏繪まゝくらもーー山まをとゝぎゝとびさる所[とびゝける](仁德紀)十七もやぶさゝあめまのをり等弭箇慨利(夫)廿七、鎌倉右大臣「とびゝける八幡の山の山鳩のおくおる聲ゝ宮もとゞろまとびこゆ(新後撰)秋上、土御門院「おきーまや山飛こえておく鴈のつむさあらゝまをめる月ゲけ[とびおくる](山家)上後れる也さ「玉づさのもーゲきゝともをゆる哉とびおくをつゝゝへる雁ゲ終[とびゝへる](平治物)中ノ五能引て兵と射る重盛の射向の袖まもさと中てとびゝへる

補[とびさく]飛分(拾)(亭子院歌合)「ふる郷の(哥合)かゝみとびさけ行雁ゝたびのそらまや春をくら(哥合)すぐさん(貫之)「春霞とびさけいぬる聲き、てかりきぬおりとをゝゝいふらん(玉葉)冬、後鳥羽院「神無月ーぐをとびさけゆく雁のつもさ吹不を嶺の木ゲらー(風雅)夏、御院歌「夕立の雲とびさくるーらさぎのつもさまかけてもる、日の影[とびさたれ](玉葉)冬、御院製「ゆふぐれの雲とびみだれあれてふくあらーのうちまーぐれをぞきく

[とふらふ]前のとふ訪と同意也(應神紀)九まに定省を訓セ(ミヤ)常の折まも又病中忌中おとどまもいへり又後世をとふらふゝ今もいへり。前のあとをとふ意まて後俗の見マフ意なり(源蓬生)十八とふらふべきをこさとの世いゝまよゝれゝーとゝへりをあつゝふ意也物せんも所せーかゝるついでまいりてせうそこせよ補(山家)上「物れもふ不ざめとふらふきりゞーに人よりもげまつゆけかるらん

○[とふらゝん](古)秋上「秋の野まに人まつ虫の聲をおりわれゝとゆきていさとふらゝん(源夕顔)初尼まおりけるとふらむんとて[あひとふらゝん](狹)三上妹の煩ひける云々ゝおらぞあひとふらゝんと思ひ給へて罷出ーゝどまあひ助語也

○とふらひ　とふらひ來(古)雜下「さゞ庵いそ」の山本戀〳〵くべとふらひきませ杉たてる門　とふらひまうづ(源タゝゞ)五心のまゝ　まとふらひまうづる事いかけれど

とふらひ出(同玉つら)十六むゝ〳〵おれりける人ののこりさりけるをとふらひ出て

とふらひ見る(同タゝゞ)卅五今一さびとふらひ見よと申たり〳〵べ　とふらひける

とふらむべや(盛衰)六二段尼まありて後世とふらひけるこそあいれあれ(同)卅五六段後の世をとふらいもやと思へば

○とふらひ　体の詞、俗の見マヒ也(源あゝ〳〵)十六京よりも打おきりたる御とふらひどもたゆゝおくおゝりり　とふらひま(土佐日記)八くたえぎとふらひまく(源ヨゝむらさき)卅二かく御とふらひまあんおいーまーさる(同タゝゞ)十四尼君のとふらひま物せんついでま(同橋ひめ)四院の女一の宮あやゝ給ふ御とふらひま必參るべけれべ(古)哀傷思ひま侍りける人ととふらひまゝりてよめる(後撰)哀傷人のとふらひあまうで來りけるま

とふのもげでも　十ふの菅薦(八雲)四十ふまあゝさる也陸奥おらでも但馬おるとも

よめり。今案ぎるま袖中抄あどま輔の字をかきされど慥おる文字未勘(袖中抄)十四(夫)廿八「ゝちのくれとふの菅でも七ふまい君をーなーて三ふまわれねん(夫)ねさせてよゝ人しらそ　とあり出所未勘(夫)卅六有家「ふけまけ

りたのめぬ鐘いおとづきて七ふさびーきとふの菅こも補(新葉)戀三よみ人しらす「おれ〳〵のぶとふのすがこもこふまさま君がこぬよいこもや祈らる、

とぶくるま　飛車(竹とり)天上より姫のむゝへま來りし所ま　とぶくるまー一つ具ーさり　云々屋の上ま

とぶ車をよせて(和名)十一五兼名苑注云奇肱國人能作飛車從風飛行故曰飛車但和名にゝなし

とぶさ　とぶさ〳〵て　鳥總立(万)三ノ四十「鳥總立足ぐら山ま船木伐樹ま伐歸つあゝさら船材を(同)十七ノ四十九旋頭歌登夫佐多底船木きるといふのとのーま山云々(八雲)四ノ十七是いいづれも木の梢也杣ま入りて木を切りてい必木の末をきりて切りさる木の跡ま立る也たとへべかいゝり也仍木まきりゝへつといよめる也以上。此御説又(袖中抄)十六ま異淵いよせつの方まよれり云く山ま木をきる時きりさる木の末を折りて同株の邊ま立て山の神を祭るといふといへり。又とぶさたてい枕詞也といへり。山神を祭るい(延喜大殿祭祝詞)ま見えたり。今も皆おゝすれどもとぶさ(夫)廿衣笠内大臣「浪間よりけさてといいもぎとぞ。宣長も畧解もきりゆきつとよめりてこそ見つれとぶさて舟木きるてふのとけーま山(後拾)戀三輔親「わが思ふ都の花のとぶさ故君もおづえのーづ心あらど此哥(袖中抄)ま云く木の末なりゝづえといふ義也

○とぶさもたさま(堀川)後賴「卯花も神のひもろぎとけてけりとぶさもさこまゆふりけて見ゆ注木の梢也とく神祭して神具をとりちらそ也

とぶひ　烽。今いふノ(和名)十二九説文云烽燧度布比邊有警則擧之唐式云諸置烽之處

置火臺臺上挿ノ掫（俗云保久之）（續紀）五ノ和銅五年正月壬辰廢河内國高安烽始置高見烽及大倭國春日烽以通平城也（古）春上「春日野のとぶひの野守いで、見よ今いくゝありて若なつみてん（風雅）夏寂蓮「いゝ〜への野守の鏡跡さえてとぶひゝよものはさるおりけり（夫）廿顯輔「いゝゝせんとぶひも今ゝたてゝびぬこゝろもかよもぬあゝぢ〜ま山（盛衰）六末の段春日野ゝとぶひをさてもゞめて、云々とぶひをあげて兵をめを同し段ゝ漢語のまゝゝ烽火（ハウクワ）ともい へり

とて 牀。署して床の字をゝけり（古）秋上「ひとりぬる床ゝ草葉ゝあらねども秋くるよひゝ露けかりけり（同）戀二せい「そゝりおくてゆめゝも人をゝつる夜ゝあ〜ゝの床ぞおきうゝりける（長秋詠藻）上「絲やのうちもをさる飛ゝふ物思へゞとこのさむ〜ろくちやゝぬらん（万）十四卅二いもがぬる等許のあたりゝ（新古）冬、般富門院大輔「ゝが門のゝり田のおもゝふに鳴のとこあらゝなる冬のよの月（續千）秋下左大臣「下葉ちる小野の萩原吹風ゝ床あれぬとや鶉なくらん。又臥猪の床あどいへり。

草むすぶ床 あどこのはゝくさ〜ゝいへり

玉の床 **むぐらの床** **ひとりねの床**

○**床をてらふ** 床を掃（万）十一廿九「眞袖もて床打拂（ウチハラフ）君まつとそゝり〜間ゝ月ゝゝふきぬ（古）戀五「夕さきゞ人なき床を打てらひなげゝんためとあれるゝが身ゝ（後撰）秋上「彦星のまれゝあふ夜の床夏ゝ打ゝらへども露けゝりけり

○**床おゝ** 床中（古）ゝい「枕よりあとより戀のせめくきゞせんゝさあゝそ床中ゝを

る（新六帖）五、よるひとりをゝ、信實「さゝりとてゝさもあらまゝの床の中ゝひざをいさきていく夜あゝ〜つ

床ゝ〜き 床錦（八雲）三下錦の所ゝゝゆ（夫）卅三俊頼「朝露のおきゐる庭の床錦ゝが

おきゝ〜まの大和なで〜こ

床ふりて 床舊て。夫婦久〜くある事ありとぞ（拾）哀傷、大江爲基「年ふれどいゝゝある人ゝ床ふりてあひ思ふ人ゝわゝれざるらん

○**床もゝる** 床離。妻妾ともゝ男女互のトクシンツクゝて

床もゝれて **床もゝるゝ**

（いせ物）十六段年頃あひゝれゝさるめやう〜〜とこもゝれてつひゝ尼ゝゝりて（賴政集）下ノ十五あひかたらひ侍り〜女のやう〜〜とこもゝる、契りとゝりてもとをみ侍りける山里へおくりつゝゝにとて

とこ 獨鈷。くゝ文字をとぶきい（源ゝゝ紫）九ひゝり御まゝりゝとこ奉る（枕）十二いへるゝ例の音便也十九

とゝそうゝゝやゝゝるとこ云々（和名）十三ノ四大日經疏云獨鈷三鈷五鈷（行法肝要抄）五鈷三鈷一鈷、金佛蓮三部杵五鈷、五部之金剛故爲金剛部三鈷、三部一体故爲佛部獨鈷、摧破杵也西方爲通調伏妙觀察智說法斷疑是摧破也又西方蓮花即理也理獨一法界故爲一鈷

ところ　蘀（和名）十七蘀土古十三呂　俗用茎字漢語抄用野老二字今案所出並未詳（古事記）中ノ四十三　いながら稲葉也　まもひもとゐろふ登許呂豆良（トコロツラ）とある。つらい蔓也同。（拾）雑春　のべよ侍りけるを見て云々ところゐるありといらへけれバ（此拾のことがき、哥次の所せ〜の所よくと〜く出そ）

補（更科日記）山のゝたよりわつかよところなどゐりもてくるもをゝ〜

ところ　所（後拾）秋上「秋も秋こよひもこゝひ月も月所も所見る君も君　所よぎいふ（山家）下「山ふゝこゐたきるありと聞えつゝ所賑ふ斧の音ゝあ所もこゝゝぬ（拾遺愚草）上「むゝの紅まもゝあき露のむもゐゝれ所もわゝぬ秋の夕暮　所あらそひ（源あふひ）十　かの御車の所あらそひをま紅び聞ゆる人ありけれバ所をゝへて（同若菜）上七十一陰陽師ども、所とゝへてつゝ〜こ給ふべく申けれバ例の所（かけろふ日記）下中四

例の所よやる　歌云々　かゝる所（同）中上廿二　かゝる所よいゝ物など思ふ人もあらゞゝの〜ゝの所（同）上下六　かの所よもある所（同）上下九　ある所よおゞやうまてまうでけり

ゐらぬ所（同）中下十二　あくれバ〜らぬ所よ物〜つる　云々　おゞ所　こと所　そこ所　ゐ所

いき所行所　もるけ所　なぐさめ所　是らのさぐひもそべて上のゝあの部よ出そ

ところ　所。是いゝ貴人をかぞへて申そ詞也俗のオ一カタオ二カタといへるよ同。三所四所などいく（源ゝゝゝ）上ノ八　兵部卿宮猶ひと所のこおいゝて（榮月の宴）四十七　只今いゝ宮一所の御ゝげよかくれ給へれバえふりそてさせ給いゝ（源きり壺）廿一　女御子さちふた所此御腹よおいゝ〜ませど（狭）四上一　二所〜ておゞ〜まどふさまかた時だよいこゞげある　是いゝ父母を申そ（榮花山）三

此二所の御中よゝ〜ゝらゞ　是いゝ關白の兄弟を申そ

ところ　所。俗と同。こゝよ出〜さるいゝ人の上ふべ〜　よゝき所（源かしいゝ木）卅三　をこ〜よゝ

き所つきてあよびをぎたり〜　心よくき所（同若菜）下、八十二　いとむげよ心よくき所あ

きありさまを

ところ　所。是も俗と同いふ所きく所と（同ゝゝ紫）十七　おゞされん所をもむゞゝらゞ

打出侍りぬる（同ゝゝあ）下、七十八　内よも院よも聞〜めさん所あり（著聞）一ノ廿二　汝が恨

所其いいれあきよあらねども（同）二卅　中所尤いもれたり

ところ　所。是いゝ俗の役所の所の字也　ゐ所（源帚木）十五。其外内侍所藏人所御書所臺盤所あどさま〜〜あり

ところ〜〜　所。万よい（拾玉）二「むら〜〜よかゝる霞をれふりよて所くよもゆる

々。へり　さゝらび（枕）三五　やんでとあき所〜〜よ御文聞え給ふ人も（同）四十四　いとさゝすぎふ

る〜〜き人の髪あども　云々　所々ゝとあゝ、きちりゞひて（同）三七　草の花いゝ菊の所〜

うつろひゝる　補（元眞）「鶯の初音をゝりゞ聞えける春いいたらぬところ〜よ

ところよつけたる　所よ叶ひつき意也（枕）十二廿　所よつけたる上らふとおゞ〜き人　云々

（源そーひめ）卅五宮待よろこび給ひて所よつけたる御あるゞなどをかーうーおー給ふ（同椎ゞ本）三所よつけたる御ーつらひおどをかーうーなーて

ところから。故の意のからはて所が所ヂヤニ依テの意也俗ゑ所ガラとにごりていへるゑ同（源夕顔）廿四所からまいてゆゝーき迄そえ給ふ（同若紫）十五そゞろなる人も所ゝら物哀なり**所ゝらゝ**（源そま）卅四御さまのゆゝーうきよらなる事所からゝまーて此世の物ともそえ給ゝに

ところからはや（源初音）十七かざーのさたゝ匂ひもあき物なれど所からはや面白く心ゆき命のぶるゝどもり**所からなる**（山家）下「峯の上もおなゞ月こそてらゝらめ所からなる哀なるべー

ところたがへ所違（信明集）廿五浮島「うき事も聞えぬ物をうき島ゝ所さがへの名ゑこそありけれ（枕）十廿。使の物さー置て人ども出ーもとめさすれどうせゑけり云々所さがへならゞおのづゝらも又いひゑ來あん

ところおく無レ所ゑてヒマァ。所もと中ゑとさ（源葵）五かねてより物見車心づゝひキマノナキ也。そてもいへり

ーけり一條の大路所おくむくつけきまでさぎさり（同）十二けふも所もおくさちこそゑけりうまゞのおとゞのゝどにさて煩ひて（枕）十八れ前ゑ人々所もおくるさるに今のゝりされゞ遠き柱もとおどにるさるゝ（宇治拾）八十二數もーらゝ十方より出

來り集りて門ゑ所おく入りそちさり

ところうる所得。時ゑわふ意そべて思フ（枕）八五えせ物の所うる折の事正月のおゝね云々さりそる折のかんどり。此部ゑ猶多ー**所えて**　**所をえて**　**所えさり**（枕）八、三人ばえそる物あなさこおさゑそむ人の子どもの云々制せられて心のまゝにもえあらぬゞ親の來さる所えて云々（源蓬生）四てざまおどけーからぬ物ども所をえてやう〳〵かさちをあらゝー（同さうお）上、七十二おまへゑことゑ人もさふらゝぎ尼君所えていとちゝくさふらひ給ふ（同をとめ）十三むりせ才人ども所えさり**所えぬ**（同わゝ紫）五京ゑてこそ所えぬやうありけれ（同初音）十四かでやゝゑ局ぎこゑーおーて佛ばかりゑ所えさせ奉りて

○**ところえゞ不**（源そー姫）五軒のおのぶぞ所得顔ゑ青こわされる

ところのーゆう所衆（枕）四、廿三雪山の所所の衆三四人參りさる（職原抄）下、廿二六位侍可レ然輩補ゝ之（禁秘抄）下、十四一、雪山の所所衆作ゝ山瀧口ゝ上藹三人所ゝ衆上藹三人立レ庭奉行ス持ニ笏振ー云々（同）中廿三藏人所雜色云々同衆員廿人也云々ところゆ

ところおく所置。おくい心おくのおくゑ同、どれよりまされる物ゑ斟酌そ意也、もとい席を避ゆづる意より出さる詞なるべー**所をおけ**　**所をおゝぎ**

（山家）上「秋ふゝこゝらぶ花おき菊なれゞ所をおものおけとこそ思へ

（保元物）上廿一段、爲朝の事を　幼少より不敵まして兄まも所をおりぞ傍若無人ありしりば

所もおりぬ（新六帖）一信實「五月雨まの瀧もあまりの水もしり所もおりぬ岩もさま哉

所おりる　人まの遠慮サレモ（宇治拾）十一十四陸奥前司則光といふ人ありけり兵家まい

あらねど人まの所おりれ力おどぞいまどうつよりりける

補　ところあらむし（榮ゆふして）婚禮ノトコロ　さてくるゝもこゝろもとおくおもしましぬ

四五日ありてぞ御ところあらむしありける

ところさる　所去。避けて所を替る意なり（源よこ笛）のい樹しやくそる意也、前の所おくまも同ドけれど是い下なるものまもいひていさゝりかろくや、所もさらぬといへるも外へ移り避ざる意なり其中まの所さり給ふ（源總角）七十一、大君の煩十分に打ふるまふ意まつよくいへるもあんひ給へる所まかをるかゝる御もまひい猶くるしりけり所さり給ふまの事よせてさるべき所まうつ詞

ろわし奉らん（同よこ笛）十七三宮こそ云々常まこのりこまきゐひ申給ふといさめ聞

えなつりひ給ふ大將も笑ひて二の宮いこよおくこのりこ心まの所さり聞え給ふ御心

ふりくおんおいしまもめる所もさらぬ（古）雜一、おゝド瀧を「風ふけど所もさらぬ

おら雲い世をへておつる水まぞありける（新勅）春上入道前太政大臣「白雲の八重山さくら

咲まけり所もさらぬ春の曙所もさらぬ（能宣）「うきしまと名をきゝくれど浪の上

まの所もさらぬ世をぞへまける（夫）廿一、欵冬藏橋、顯季「かよひこし井出の岩もしたどる迄所

もさらぬさけるやまぶき

ところせし　所狹。せしいせばしの意まてアタリモセバキホドニ、物の多くみちひろぐる意也故まの轉してキウクツ、キノツマル、キブサク、ウツトシキ意、まさコマル、不自由、モチアツカフ、アツカヒニクキ、ナツコウ、おどの意まもいへり、さて貴人のオモ〳〵シク、タイソウ、おる意まいへるい平人とりい何事も身のフリマハシキウクツ、まていきやひいきちひろおる物おれ（落くゐ）四文まていいりゞおが〳〵と

バ也よく〳〵味ひまれバもとい同意おり

もかゝんまづりらまさらんとまれい所せし（源蓬生）十八とふらふべきをまざと物せ

んも所せしかゝるついでまに入りてせうそこせよオツコウおり（同明石）卅夜ふりして出給

ふ御車いまおく作りまれど所せしとて御馬まて出給ふタイソウおり所せく（枕）一ノ驗者

おどの方いいとくるしげおり云々こうどて打ねふれバねふりおどのまこしてとゞゲ

むるもいと所せく云々（狹）二上廿三都の内の御ありきをさまも御心ままりせ給いぞ所

せくまりおき御もておしおれバッキウクおり（枕）九十八横笛いいまどうをりし云々車まて

もかちまても馬まもまべてふとところまさしいれてもまるも何ともまえぞ云々人の

もとよりとりまおこせまるをおしつゝまてやるもまゞ文のやうまえまり笙の笛

い月のありきまは車おどまて聞えまるいまどうをりし所せくもてありひまく、ぞ

まゆる此段横笛のあつりひよきまくらふれバ。俗のオツコウといふまよくあまれり（源末摘）十九雨ふ

笙い物ましくてあつりひおくきおりり出て所せくもありまは笠やどりせんとまもおぞされぞやありけん身ノフリマハシニコマル意也

所せう（源若紫）十八所せうおぼしむばらで思ひ給へよるさまことある心のゐどを御覽せよ（キブサク憚るあど也）（同やとり木）四十八たのもし人は思ふ人もうとまし心そひ給うけりと見給ふは世の中いと所せう思ひあらられて（物のツカヘタルヤウニウツトシキ意あり）所せき（枕）六ノ五せもき緣は所せきひの御さうぞくの下ゲさねあど引ちらされさり所せきまで（源桐壺）廿九とんゞきろくのからひつどもあど所せきまで（同夕顔）五おしのでひ給へる御袖の匂ひもいと所せき迄ゥをりそちさるは（同紅葉賀）十ちひさき屋どもつくり集めて奉り給へるを所せきまでゐそびひろげ給へり（是ちアタリモセバキホドみちひろこる意あり）（同）十出給ふけしきいと所せきを人くもしは出て見奉れば（オモ〳〵シキ御ありさまをいふ）（同總角）五十八所せき御いきゐひあればおのづから事ひろでりて（御いきゐひのタイソウナルなり）（うつゐ祭の使）九御門「所せき身ハよそあれどあそぶある宿は心をこれもやるゥあ（キウクッあり）（同初秋）下六十九御門御詞そこゐ參りきて承らまゐしき事あれどえさもゲは所せきこゝちして心もとあくありつるは（是も貴人のキウクッニオッコウナル意なり）（元眞）廿二「おらくものおらぬやまぢゐゥくれあんか、るうき世の所せき身ハ（源ひゥもと）二冊雪もいと所せきによゥしき人ざはこえぞありはさるを（狹）四下六常よりもあつさ所せき年はてお前はもあやましくおゐさるゝは（是ちふりつむ雪あつさなどはモチアッカフ意也）所せきまで（後拾）戀二「あま雲のゥへるもゥりの村雨ゐ所せきまでぬるゝ袖ゥあ（玉）旅俊頼「草枕さゝげきうもきあしのやハ所せきまで袖ぞつゆけき（是らモチアッカヒウツトシウもびしくコマル意也）（拾遺）雜春つゐさうぞくして侍りける女野老どものべは侍りけるを見て何はさもそるぞととひければとところ堀るゥりけりといらへれば（賀朝法師）哥云々ゥへし「春の野はゐる〳〵見れどあゥりゥり世はところせき人のさめはハッコウニとところゐる女の哥なれバオゐそ緒のさへゲさきてそつよゥらぬ也（堪ガタキよてゐ不自由ナル意也）所せけれ（源紅葉賀）十八さうの琴ハ中のふ（アッカヒニクキ也）所せゥり所せゥりける所せゥりつらん（所せくあり の約なり）（源總角）卅五舟はさり所せければてと〳〵しき御やどりあどもかり給ハぎオッコウ也（榮きるハもひし）二むゥしハかく位ゐてうせさせ給ふハ又あき事おゐく所せゥりけれど今の世ハさるきびしき事もあし（オモシキ也）〳〵（源行幸）廿四、源の末摘の哥を見給ふ所は此哥よみつらんゐどてそまして今ハ力あくて所せゥりつらんといとゐしゲり給ふ（力はしさる女房の侍從ゲ居らねば哥よむもオッコウニモチアッカヒコマリつらんとの意也）（同さし姫）卅二、とのゐ人ゲかをる衣をえて着さる所はいひしらぬ句へるをうつしきて身をもさえゥへぬ物あれば似つゥハしからぬ袖のゥを人でとはとゲめられめでらる、あん中く所せゥりけるキノッマル也て、ろはまゥせて身をやをくもふるまハれぎ云々所せき人こハのところせきこハ貴き人の意あり の御うつりゲはてえもを、ぎをてぬぞあまりあるや

所せげる　いとやーげる、やーげるおどのげる也　所せげりて（大和物）五、をだ山の段　此をゞいといさうおいてふさへゐてゐさりこれを猶此よめ所せげりて今迄ものぬ事と思ひてよゝらぬ事をいひつゝ、ル也邪魔ガル意也　所せ　たへげさーをさへげさむゝ、なーをむゝな、といへる例也（夫）八慈鎮　「人まさゞいとひやせまー庭の草ゐあゐ所せの雨のけーきやウットシクモチアッカフ意也　補（宇治拾）十二十六　家ゐれゞすみ候よおもーまゐげかさーけゐくところ、せく候ゐりいゝゞ仕べゝらん（万代）戀五、花園左大臣家小大進　「つらきをも思ひいれゞとおもへども身をーる雨の所せき哉（源玉葛）十三　いさゝゝの身ゞろきせんも所せくゐんあるべき（著聞）よろづの虫そくもせ侍るも所せくおゞえてコハメンドウナル意ナリ

補　とこもゐ　常花（万）十七十　「たちもおい常花よもゞゞと、ぎにすむと來ゐゝべきゝぬ日ゐけむ（万代）春下前攝政左大臣　「いゝよーてとこもゐよもゞ山さくら世ゝ春ゐゞら見つゝ過さむ

とこともよ　常住不斷の意也（万）二卅　「さゞさゝど千代常登波よさゝえんと云々（同）四廿二　「常不止かよひーー君ゞ使こゞ云々（小大君）十九（夫）九　「とこともよゆけゞゐりけり瓜つくりそのこと（夫）そこともなきよさてりーや君（拾愚）下　「君ゞ代ゝよさそのゝりのとこともよ松と杉とや千さびさゝえん（夫）卅、閑居三條入道左大臣　「とこともよ身をもたゐれぬかげざよも月入りぬきゞみえにゐりけり補（金）秋公實　「とこともよふく夕ぐれの風ゐれど秋さつ日こそゞゞーゝりけゞ　とこもよ　出そ

とこよ　常世　とこよのくゐ　常世國（万）一、廿二長哥　我國ゝ常世よゐらん　畧解云とこしゐへよかさらぬ國といふ也（垂仁紀）九　是神風ゐ伊勢國、則常世之浪ゐ重浪歸國也　是も祝していへるゐりとぞ（雄畧紀）廿八　水江浦島子云々入海到蓬萊山歷覩仙衆（万）四卅九　「吾妹兒ゝ常世ゐ國ゐゐゐみけらーむゝーー見ーよりゐりえまーよけり（同）五廿三　「君をまつ松浦のうらのをとめらゝ等已與能久爾のあまをとめゝも（古事記）下廿六　舞するをゝゐ登許余よもゞゞも　契沖古事記哥の注よ仙女ゐどよやとゐやしゝおゞしめゝもゐりと（万）四、四十九　常呼にとわゞゆゝなくよ　畧解云こゝゝ異國をいふいへり　遂適ゐ於常世ゐ鄕ゐ垂仁紀）廿六　命ゐ田道間守ゐ遣常世國ゐ令ゐ求ゐ非時ゐ香菓今謂橘是也云々田道間守至ゐ自常世國ゐ云々是ゐ常世國則神仙秘區俗非ゐ所ゐ臻是以往來之間自經ゐ十年ゐ（神代紀）上廿八　聚常世之長鳴鳥ゐ。或云是ゝ常夜よて字よゝか、ゝらぜゝけるゝ古の常也今かく常夜ゆく折よつどへてゐゝせーー鳥ゐるをもて後よ負ーー稱なるを其始へめぐらーてかくいへる也常いふ常世とゝ異也といゝ。今案そるよ此說いゝゞゐるへき猶此め來てつどへ。鷄ゝ他鳥よりも鳴聲のそゞをてーー意なるべーー。長き物ゐる故よ考ゝいふ也とぞ。そべてもとゝ如ゐ字又時の字の意をもよいひ又仙境をいひ又轉してゝ遠き國をもいへるよて次の雁の來る所をいへるも胡雁の意よて北の方僻遠の所をさーていへるなるべし

○**とこよ** 此以下雁の居る所をいふ（續日本後紀）十九興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十長哥云九重能御垣之下爾常世雁率連天云々是も不變を。此次の哥より大（蜻蛉日記）中上九長哥 かりのさゝれよあらばこそ君ゞとこよもあれざらめ（源そま）卅五「心ゝら とこよをそて、おく雁を雲のよそよも思ひける哉（元輔）十五「こゝゝさもこえてゐ ゞひるゝりゝねもも風よもらふとこよゝなゝき（後拾）秋上、赤染衛門「おきもゐぬさゞと こよこそかゝゝけを春ゝへりよゝ雁もなくなり

とこよむゝ（字鏡）蟇止己與牟之

とこなつ（万）十七長歌四 そのたちやまよとこなつよゆきふりゝきて（同）四十「たち 山よふりおける雪をとこなつよこれどもあゝぎかむゞらゝゝ（同）同「たち山よ ふりおけるゆきのとこなつよけぎてささるゝかむなゞらゝも（順）「秋ふゝくいろ うつり行のべなゞらなをとこなつよ見ゆるなでゝこ

とこなる、床馴（著聞）五、四十一「わびつ、ゝあれざよ君よ床あれよかもさぬよもの まくらなりとも

とこなつゝゝき常よいつもく〜なつゝしき也なつゝきゝ俗のスイテヨシト思ふ意あり。とこゝゝ前のとこともをもじめ次よ出ゝさるくさ〜皆常の字の意也（万）よゝ十七常花（同）二ノ十七常宮（同）十七 など其外常の詞をそ卅一とこもつもなへていゝる猶あり

又（同）十七四十等許奈都よ雪ふりゝきて又ふりおける雪をとこなつよ名おおらず冬の雪の夏迄もある（源常夏）十一「なでゝこのとこなつゝゝき色を見ばもとの垣根を人 やたづねん（野宮哥合）「秋も猶とこなつゝゝきのべながらうさゞひおける露ぞも らなき

とこなめ常滑。常なめらゝなる也なめとい水苔のたぐひをいふとぞ。いつもゝむらぬ意也（万）十九「みれどあゝぬ吉 野の川の常滑のさゆる事なく又ゝへりこん（同）九ノ十一床奈馬よ（同）十一十四泊瀬路ゝ常 なめのかゝこき道ぞ（堀川）公實「みなさまきとこなめもゝるあゝ川ひまこそな けれ波の白ゆふ（夫）廿四よゝ仲實とあり

とこる常井（夫）廿六よゝ信實「かきやれば庭よ流るゝ山水のよどむ石間をとこ井よぞくむ

とこやみ常闇（神代紀）上廿七六合之内常闇而不知晝夜之相代（同）廿八長夜（續千）神祇俊光 「久方の天のいもとの山のもよとこやみもれて出る月哉 補（万）十五卅三「あもむ日を其 日とおらす等許也未爾いづれの日まであれこひをらむ

補 **とこゝろ** 利心（万）十一「いでいゝよ彩もこゝろ〜よ利心のうもるまでおもふこふ らくのゆゑよ（同）十二七 鋒心もあゝ

とこめづら常ゐいつもめづらゝく思ふ意なり哥ゐゝ大方例の床ゐゝけてよめり（六帖）二「ふゝてぬるとこめづらな

る君あれば今ーもあへるこいちこそすれ(万)十廿七「難波人あーヤさくやのをゝたれどおのゞつまこそとこめづらーき(とあるも同意也)(兼澄集)「ふる郷れことやつさふるをとゝぎは初音あらねどとこめづらあるる(散木)上卅四「あやめ草君ゲよどのゝねならねどとこめづらよも思へらーあと(同)同ト十六「蓬さよ霜ゲきよける宿かれどこよひの月ハとこめづらあり 補(躬恒)「梅花色ハめかきて吹風よ匂ひくる香ぞとこめづらなる

とこをもり 轉(和名)十一六 唐韵云轉音博 車下ノ索也釋名云轉在ニ車下一與ニ輿相連縛者也(今案和名度古之波利)(落窪)一いさりひーけるをどよ一の車のとこーばりをふつ〳〵ときりてければ大路あらまもとと引おとーつ

とこーあへ 儒書ハ長の字を訓ス(此ともの常の意也)(夫)卅六、千里老眼早覺常殘夜「老てぬるめハもやさめぬとこーあへよハよあくれば飽意也ねてのゝぞふる(散木)下廿七「もゲへせぬあげきの森ハ冬くれど常よもかもなとこーなへなり(長秋詠藻)上「岩たゝむ山のかさその苔むーろとこーなへよも物思ふらな

補 とこを(万代)秋下好忠「よそよのゝ鹿のとこをを聞ーより秋ハ悲ーき物をーりよき

補 とえさのうづを 十枝の卯杖(夫)一、爲相「けふでとのとえさのうづをつれをーて君ハを

かなのよろづよの春

とてもかくても とても 俗の迚もの意 補(万代)和泉式部「とてもかくてもよそよなげく身の果ハいのゞハならんとをらん。一ッの とてハ とても 前のてにをとの とらく の末に出を

とありらゝり とざまかうざま 補(源常夏)十四 なのめよおもひ過さんことのとざまらうざまかうざきを(宇治拾)二廿三 あまゝ、ひとざまかうざまよをるよ(濱松)四下此ところもこの事とざまかうざまわゝさまろるよ。是ちと共に とらく の所に出を

補 とざま 外ざま也(源浮舟)とざまよおもはれば(同夢の浮橋)十五すこーとざまに見給へば

とありて (抄云ばーあるてと也とばりありてなどいへるに同意あるべー)(枕)四四 ノたばーやおどさ夜をすて、いを ぎ給ふとありてあどいへど云々

とさう 抖擻。打ちふの義又行脚をいふ(白文)廿二十八 仙棹、浪悠揚塵纓、風抖擻ス(本朝文粹)一ノ五、菅贈大相國秋湖賦 不求ニ斗藪望ニ郵亭一(名義集)一、五十八 新云ニ杜多此云ニ抖擻一(盛衰)十八初段 かくてとさう修行の後ふさゞひ高雄の邊よ居住ーてありーくらーける(宗久都のつと)六十余州のとさう殘る所あく卅一字の風情尋ねぬ方もあーこ(王維)ゲ詩よ抖擻辞ニ貧里一(とも見えたり)

とざー 扁(和名)十三 扁音徑、度佐之 戸扇、鉄鈎所、用ニ於内一以關門也(催馬樂)東歌 かをがいもとざーもあらばころそのとんのとをれさゝめ 關のとざー(千載)冬内大臣「ふるまゝよ

あとさえぬれば鈴鹿山ゆきこそ關のとざし成けれ　よもぎのとざし（月清）「草むすぶよもぎのとざしのかれしよりうちもあらいはおける霜かな　葎のとざし（夫）十、後九條内大臣　「人とぢぬ葎のとざしあけぬ夜の露の道より秋やきぬらん　草のとざし（盛衰）七ノ六段　賤げふしどのもとふの小屋民のすまひの草のとざし云々

補　ときかもさぜ　時違ぜ也（宇治拾）今ゑど時のいさぜこといひければ（同）ときかもさぜもてこゑかはるあとくもしれとてやりつ

とき　敏　とき　疾共に　とし　の所に出ぜ　ときうま　駿馬いうなの順ゑ出ぜ。　とき　解　とく　の所ゑ出ぜ　ときさけ衣いうなの順に出ぜ

とき　時。四時の時也　ときい（伊勢物）二段時いやよひのついたち（同）八十三段時いやよひのつでもりありけり（同）九十四段時い秋ゑあんありける　四つのとき（古）序かゝるよ今ぞべらきのあめの下ぞろしめす事よつの時九ゝへりよあんありける

とき　時。時代、折の意　ときぞ（蜻蛉日記）中下「思ひ出る時ぞゝあしきおく山のこの下露のいとゞしげきよ

とき　時。時剋の時也　ときい（蜻蛉日記）中中一廿一初夜行ふとて法師ばら云々念誦をるゑどよ時い山寺ゝさの貝よつふくるゑどゑありよけり（同）下上廿一時い子ばらりあり　補（玉葉）

雑二永福門院内侍「祈ざめして時いいつともぞられぬよ明るか鳥の聲ぞきこゆる　申のとき（源桐壺）廿七申の時よぞ源氏參り給ふ　午の時ばゝり（蜻蛉日記）上下十五午の時ばゝりよ十六酉の時ばかりよ　亥の時ゑなる（同）中下八ゑのときにありよけり　亥子の時（源浮舟）十一夕つのさおいしまして亥子の時よいおいしまつきゑん。かさねていへるい俗の四つゝ九つよいの意なり

巳の時打くだる（うつゑくらひらき）中十七巳の時打くだりてのゑどよ。戌の終り寅のむゝめ子一つ丑三つ丑四つ又子ぞ過よけるゑどいへり一刻一點　い　の部よ出ぜ　時を問ふ（源葵）十一、髮そぎの所よけふいよき日ゑらんのしとて暦の博士めして時といせゑどし給ふゑどゑ　三時三時（かけろふ日記）中ノ十八中われいまして二とゑ三とき迄物もいたれぞ　右三樣の内、四時の時と、時代折の時と、いひさまおゑくい同しやう也　又時うつるなどい、四時よも時刻よもいへり、そべてゝなの順よ出し

ゝさ時　か　の部よ出ぜ。つ、よく味ひて後ゝよいしいふべし

とき　時。此時い盛りの意よて時めき榮ゆるをいふ（うつゑ初）時よてある（大和物）六深草のみゝど、申ける御時良少將といふ人いとゞきよてありけり　ときめく　別よ出す（榮花山）十一たゞいまいいとときよおいしまは是も敬語ゑらぜゞ時にある　時ゑる人（うつゑくらひらき）下廿二いと時ゑる人くおゑくさふらふゑれゞ物しけぜどいゝゝ御口づゝらの給へらんをゞゝしてけくよいゑひきこえ侍らん　時ゑらぬ身

（拾）雜下圓融院の上鶯とかとゝぎすといづれまさると申せとおかせられければ朝光「折らまいづれとも分き鳥の孫もいのゞ定めん時あらぬ身ハ（千）といらい輔仁親王「秋くれゞ秋のけしきもみえけるハ時あらぬ身と何まいふらん常の時ならぬ又時なる時成也別まと出そ時ありける人時なくある（古）雜下時ありける人の俄まに時なくなりてあげくを見て云々時ある時あき（榮月の宴）三そこらの女御こゝやを所參り集り給へるを時あるも時あきも御こゝろざしのかどこよあけきど云々（うつか初秋）下七十九、仲忠の母の琴ひく所まと時あるをゞそれをまし時あき手をゞこと事まつけてめで給ひて時とらるときをとらるゝなり（源紅梅）十一匂宮紅梅の若君まの給ふ詞春宮まハいとまをこしゆるされまさりいとしげう若君おもかしまどハそめりしを時とられて人ところめりとの給へゞこゝハ若君の姉入内あり し故まざれての給へる時おとろふ時衰なり（後撰）雜三法皇ゝへりこ給ひけるを後くハ時おとろへありしやうまもあらぜありまけれハ清和院の君哥云々時うしなふ時を失ふ也（古）序あるハきのふハさゝえおでりて時を失ひ云々（源すま）十九「いつゝ又春の都の花を見ん時失へる山賤まして（月清）「秋風の紫くさく草枕時うしなへる袖ぞ露けき時まに遇ふ也（枕）十六いこどう時まあひまさる人の智まありて（伊勢物）十六段三代のこゝろどまつゝうこつりて時まあひけきど（續拾）雜春俊成「神山まに引のこさる、葵草時まあハで

も過まけるゝか御時もて時めき給ふいきゝ（源はしひめ）九大后のよこさままおゞひを以ての意也しゝまへて此宮を世中まに立つぎ給ふべくわゞ御時もてかしづき給ひけるさこぎまに時のさゝり（うつか くらひらき）下御息所只今の時のさゝりまておハしませゞ時の所（同國讓）上七十二よろづの人く參りて故殿の人もかつき奉りかど給ふつゝうまつる受領ズリヤウかどもまめやゝなる物くさものかど奉れゞ時の所のやうかり時の人（落窪）四さゞ今の時の人の御ぞうとてかしさちてあらんゝし（うつか忠こそ）此御息所ハさゞ今の時の人かり（同藏開）下猶其中まに藤侍從仲忠いこどき時の人かり（源若菜）下五十五右衛門督ハ中納言まかりまきゝし今の御代まハいとをさしくおゞされていと時の人かり（枕）十二中將かりける人のいこどき時の人まて心かどもかしこかりけるゞ云々わゝけれどさえありいさりかしこくて時の人まおゞにかりけを時の受領（落窪）一時のぞりやうハ世まに德あるものといへゞ。常の時の人時のこゝろど時のこゝろど補ときのかど（宇治拾）三まさせ給へと申せときのかどぞあらんぞる補ときのもか（榮初花）なかくしき人のたとへまいふ時の花をかざそこゝろへまや

ときこゝろ齋。僧の飲食をいふ今と同（うつか梅の花笠）さゞこそこゝらの年頃露霜草ゝづらの根を齋

よーつ、[齋れう]齋料（宇治拾）一ノ八山伏の云々ミさけへ參りて今二千日候いんと仕候ひつるゲときれうつきて侍りまりあづゥらん云々[齋まてある]（著聞）十六四酒をそゝめけれバ斷酒のよーをいひてのまぎさらバとて破子を一合あゝへけれバ今日いときまてあるよーをいひてくいぎ此ときまてあるといへるも非時の食をバつゝーむ日をいへるなるべー補（後撰）雜四亭子院まさふらひけるま御ときのおろーさまもせゝりけれバ（うつを國讓）中ノ二六御ときまゐりをゐされどきこーめさぎ（枕）齋からをのときのさをくふ

[とぎ]伽。俗と（增鏡）の序まに二所同まに見えゝり（盛衰）四十三、四段宗もりの生るゝ前の事をいうけてゝべとぎまをせさせんといふ所まに二位どのまに向ひて清盛の詞必弟ま

[ときいゝる]時到（盛衰）十三三段高倉の宮御心時いゝりぬれバ云々帝位をふむきべき時の到るまもや云々

[ときた]常磐。トコイハの約まて常まに（万）三ノ廿五常磐（トキハ）（同）十一ノ九常石有（トキハナル）云々（後拾）春下通宗

「をーむまいちりもとまらで櫻花あらぬ心ぞときゝありける[ときたま]（安法集）「とまれどもいきの松原思ひやるときたまのみゐゐむべきゥな（新勅）戀三鎌倉右大臣「ゐらま弓いそべの山の松の色のときゝまに物を思ふ頃ゥな（夫）十八土御門院小宰相「つくをぬの松の炭ゲまおーゐへてとゐたまーげくゝさつけふりゥな[ときたの]（拾玉）三「あらゝれん秋をもーらぬゥへでゥゐときたの色をゐもーぬをみて（拾）賀廿古「ふく風まよそのもゝぢゝちりくれど君ゲときたのゥげぞのどけき（躬恒）「ひさまこぬ人をまつまやあえぬらんときゝの戀とゐれゝゐりぬる

[ときたゥきた]常磐堅磐。右まに同意ゐれど堅磐ゝ如字ゥ（古事記）上四十九常石堅石（トキハカキハ）（延喜たき意まて是ゝ祝をる詞也祭）祈年式）皇御孫命ノ御世手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉（拾）賀廿九兼盛「山ーゐの山の岩根まに松をうゑてとゐゝゥきたまいのりつる哉（光經集）「君ぞゝんときゝゥきたの色ゐがら松と竹との万代の春（夫）廿一「神まつるきぬがさ岡の岩根松久ーくゝさてれとゐたゝかゐたまに

[ときたぎ]常磐木（うつを藏開）上五十八花のゥゝさゝらのときゝ木まに秋をきゥをるもぎの聲哉廿九爲家「風わゝさる小田のをぐろのときゝ木まに秋をきゥをるもぎの聲哉

[ときまに]時まに。是ゝ上の詞まつゞけて次の事をいひ出を折まいへり（源帚木）十九ゥゝさゝまろむきぬべきぎゝまゐんあるとねゝさげまいふ時まに云々（同東ゃ）十三云々とよろーげまいふ時まいとうれーくゐりて（宇治拾）八ノ四ゆるぎ〳〵て土より一尺バゥりぬるぎあゲる時まこゝいゥゐる事ぞとあやーがりて（神代紀）上卅五至期（トキニ）補（大和物）さをゥりまに侍りー御くーをといひてゐく時まをとこのこゝちいといとど

ときよとりて　とりて の所よ附そ

ときよよる　時よ依（源紅梅）十四世の人も時よよる心ありてよや（同竹川）初人の心時ゐのこよるさざありければ（鎌倉右大臣集）下「時よよりそぐれば民のあげきなり八大龍王雨やめ給へ折による。共よ次の時ゐ意あり　たぐふと類語也

ときよつけ　時よ付　時よつけつゝ（拾）雜下貫之「春秋よ思ひみだれてときゝねつ時ゐつけつゝうつる心ゝ（古）長哥貫之時よつけつゝ哀てふ事をいひつゝ時よつけさる（源總角）八世の中の思ふ事の哀ふもをゝ〜うもうれゝ〜うも時よつけさるありさまを心ゐこめてのこ過る身おきゝ

ときよなる　時よ成る。時節の來りしおり（万）十一廿六「時もりの打おれつゞこゝぞふれば辰ゐゝおりぬあむぬもあやし（うつゝ藏開）上三その娘とつぎ時ゐおり給ひ〜ゝゞ（宇治拾）七廿事やう〜もてげさよおるよ引出物の時よおりて

ときよのぞむ　時よ臨む（拾）哀傷石見よ侍りてあくなり侍りぬべき時よのぞみて

ときよあさる　時よ當る（源帚木）十六人の心の時よあさりてけ〜きもめらんこるめの情をゞえさのむまゝく思う給へ侍る

ときよ〜さげふ　時よ隨ふ（源をとめ）六時よおさげふ世の人の（同竹川）十七琴笛のおらべ花鳥の色をも音をも時よおさげひてこそ人の耳よもとまる物おれ（濱松）三行ゝもり時よおさげひさる花の色鳥の聲をもさげ身おおゞ心よ見もやを人もおく（枕）三十六さうぞく時よおさげひてからきぬなど今めゝ〜うて

ときゞ〜　時々（万）二ノ卅二君と時〳〵ゝめきゝて（源帚木）廿四たゞ時く打ゝさらふ宮づゝへ人おどの云々（同明石）三例の雨をやゝおくふりて風ハ時々吹出つゝ（枕）八廿五時々かやうの折おゞえおく見ゆる人おりけり（拾玉）三「おめてけり片岡山の杉の庵よ時〳〵さつゝ朝けふりのゝ（夫）十六光俊「おゞらきの山ゝきゝぐれふる雨よときゞ〜まゝる雪のさむけさ補（續古）戀四師氏「ときゞ〜ぞ時雨もゝけるよとゝもよわびつゝふるゝおみさおりけそ（山家）上「中々よときゞ〜雲のかゝるこそ月をもておそゝさりおりけれ（万代）夏嘉言「中〳〵よくもりもておゞねぬべきそときゞ〜てらに夏のよの月（月清）上「まどのうちよときゞ〜花のゝをり來て庭のこそおゐ風をさふおり

ときゞ〜よてる　（源帚木）廿四時〳〵よてもさる所よてこそれぬよそゞと思う給へんゐゝ

ときゞ〜の　ときゞ〜ゝ（源若紫）卅一京の御そみゝさづねて時〳〵の御せうそこおどあり（同）廿四ときゞ〜ゝよのつねなる御けゝきを見もや（蜻蛉日記）中上十七よるゝせゝいの車の聲ゐむねつぶれつゝときゞ〜ゝねいりて

ときとおく　いづれの時と定まる事なく也（万）九、廿二時と無雲ゐ雨ふり（同）十二、廿四「さそれ草わゞ紐ゆつく時とおく思ひさされバいけりともなし（散木）中四十、隨心供佛樂一時とおく花のあゝ水むすぶ手のゝさゝゝぬ迄もそおへつるゝか

○ときぞともおく　ときぞともあき（万）十二、卅九「春日野の淺茅ゞうへゆおくれゐて時ぞともあしさゞ戀ふらくゝ（古）戀二、敏行「わゞでとく物やゝあしき郭公時ぞともなく夜さゞおくらん（拾）戀一「あし引の山下とよゑぬく水の時ぞともあく戀わさるゝかな（万）十一、卅三ゆゝ時ともなくも戀さるゝも（源榊）廿「あげきつゝさゞ身ゝゝくてもぐせとやむねのあくべき時ぞともなく（夫）十四、信實「雨過て時ぞともあくおく露も今ゝゐふべと虫のおくらん（拾）物名「おもゝゝげゆゑバゝゝゆる君おれど戀しき事ぞ時ぞともあき（源幻）十九「よるをしる螢をみてもかあしきゝ時ぞともなき思ひありけり

補（續後拾）雜中、定家「跡さえて時ぞともなきよもぎふをいゝゆ日影のさしてとふらん（風雅）戀一、爲家「郭公今ゝさつきとあのるありわゞしのびねぞ時ぞともあき（新拾）戀一、俊成卿女「人しれぞ思ひしのぶの山風ゆ時ぞともあき露ぞこぼる、（新續古）春上、榮仁親王「山賤の時ぞともあきをさひゆもをりゝさをれぬ春のさゝらび（同）秋下、花山院御製「山田もる人とゝあしゆひたもへて時ぞともなく物をこそ思へ（万代）雜上、眞昭法師「鶯のあくやとやまの松の葉ゆときぞともあく雪ゝふりつゝ（散木）「藤でゝも袖ゝあゝしの浦あれやゝへるなこぞ時ぞともあき（玉葉）秋上、定家「里ゝあれて時ぞともあき庭の面も本あらの小萩秋ゝ見えけり（万代）戀四、仲實「東路のゝやゞぬまのかやよ花時ぞともなくせあぞ戀しき

補　ときとらるゝ　（源紅梅）十一「いとしげうおもゝしまどもはめりしをときとられてひとろゝめり

ときをさすれぬ　不忘時也（玉）春上、資季「故郷ゆ今ゝまつらんゝへるさの時を忘れぬ春の雁ゝねときをまつ　ときまつ　の所ゆ出ゐ

ときわゝぎ　時分ぎ（万）六、廿二「湯の原ゆあくあしさづゝわゝでとく妹ゆてふれや時不定なく（古）雜上「かぎりあき君ゞさめゆとそる花ゝ時しもさゝゝぬ物ゆぞありける（枕）三、五「おしあへさることりゆありさる中ゆときもさゝぎてき紅葉のつやめきて

ときさけ　解分。体の詞　ときさくる　幷ゆ衣ゆ（散木）下卅三、長哥「さゞときさけの麻衣あさましきまで云々（夫）七、仲正「夏くれゞしつゞ麻ぎぬときわくるかさいおゝてそ心やそけれ

ときゝむる　時替（狹）三上、廿一、今姫君おゆ所ゆ君おゆ「いかでまろゆて時もやゝゝゝるゝいとそへあき迄おゞえ給ふこゝゝ時刻也時節ゆもいふべし

ときもりもさぎ　時替さぎをうつさぬ也（枕）五十三　これさゞ今とゝの物ありたれも〳〵集りて時りもさぎぬひて參らせよ（宇治拾）十四十五　今のゆゞ時りゝさぎもてこといひけれゞ

ときもりもさぎ（盛衰）十七七段　時もりもさぎ歌云々とよみさりけり

ときよ　時世　ときよへて（伊勢物）八十二段　時世へてひさ〳〵くありよけれゞ其人の名忘れよけり　時世よ〳〵さゞひつゝおとろへて　とき世うつろふ（源寄生）十五　時世よ〳〵さゞひつゝおとろへぬれゝ時世のおゞえ（源帚木）四十五　人ゞらのいとよけれゞ時世のおゞえおもくて物〳〵給へど

ときたゞふ　時違（蜻蛉日記）上六、倫寧ゝ陸奥へ出さつ所よ　とまる人もさまいていふりさなくりかゝ〳〵きよ時さゞひぬるといふ迄ゆえ出やらぎこゝい時刻也

ときぞともなく　ときとゞく　の所よ出ぞ

ときそうぞ　時奏ぞ。亥の初より寅の刻ぞる也（禁秘抄）上　奏ゝ時事、上古隨陰陽寮漏尅、奏ゝ之云々をゝり迄官人の奏ぞる也

丑杭以後爲明日分　とのゐ申　の所あゝせ（枕）十一十四　時奏するいゝどうをゝ〳〵いゝどうさむきよ夜おゝばりおどよ云々　弦うちおどゝてゐんけのおよゝ〳〵時丑ゝつ子四つおどあてもりなる聲よいひて時の杭さゝおとおどいゝどうをゝ〳〵子九つ丑八つおどてゞさとびさる人ゝいへゞべて何も〳〵四つのゝぞくひゝさ〳〵ける（抄）十二時の時〳〵よ杭をさゝ事あり禁秘抄よ丑杭とある是也。陰陽寮の屬官よ漏尅博士あり漏尅とゝ銅壺の水ゞさゝりてたてる箭よつけおきゝ刻の一つあらゝるゝを一尅とゝて子一つ二つ三つ四つおどいへる也とゞ此頃も猶上古のでとく書夜を四十八尅一時を四尅よわゝちさる也。子九つ丑八つ云々、是ゝ時をうつ數をいへる也（延喜式）陰陽寮諸時擊鼓子午各九丑未八寅申七卯酉六辰戌五巳亥四云々

○時まうぞ　申ぞも奏ぞも同（大和物）六　時申ぞ音のゝけれゞきくよ丑三つと申けるを聞て

ときのをゝり（天智紀）卅二　トキヲナハリニメ　四尅而皆散　ときのきざみ（同）十七　置漏尅於新臺ウテナニ　時のふさ

時の簡（禁祕抄）殿上　小板敷西有ニ棹間小庭時簡膳棚灯樓（新勅）物名　ときのふさ顯輔（同）こいたゞき時のふさを沓かうふりよ云々俊忠（新六帖）ちつりの月信實　「丑の杭さゞに月のゝけ出て心ぞむ夜の時のふさりな

補　ときつとり（散木）郭公をよめる　「ときつとりなく音雲ゐよどゞろきてゐゝのもやゝようづもれぬらん此哥天木よ出さるゝ郭公なくね雲井よ云々とあり

ときづりさ　時司（枕）八ノ十二　時つりさなどゝたゞかさもらまて鐘の音も例よゝ似ぞ聞ゆるを云々（抄）漏尅博士也案ぞるよ其人をも其ヤクショをもいふべゝ

○ときもり　時守（万）十一廿六　「時守の打鳴鼓りぞふれゞ辰トキよゝ成りぬあゝぬもあやゝ

（夫）卅二爲家「時もりの雲ゐのこゑをへだてきてゝわるつゞそまなる、山里

○ときのつゞみ　時の鼓（夫）卅六爲家「うつりゆく時のつゞみの音ごとまわりれのとゐく

あるぞゝあ〜き

ときつくる　時つくる。群鷄の時を知りて聲を發そるをいべるあるべ〜告る意ゝと思へど後々鬨ばゝり作りて戰ひせぬを鷄軍といへば俗のごとく時作る意

なるべ〜（堀川）公實「曉の時つくるあり鷄の聲打ゝい〜もねをならべて

ときつくる　時はくる。一同ま聲をあぐるをいふもとい鷄より出さる詞なるべ〜代ニ吠狗ニ「て仕へ奉る隼人の吠聲を發そるま類〜さる詞也鬨の字をもかけり戰

ひまいへる（永久）唐人俊頼「から人いゐゝのをしまま船出〜てもゝさの沖ま時つくる

も同意也

あり（同）同兼昌「海原やたゝさの沖まゝりたるから舟に口本ノと吠つくるあり

合圖又定例まて一度ま聲を立るなるべ〜 補 鈴木武雄云周防あさりまて舟人の汐まちそるを時つくると

云「から人いゐゝのをしまま舟出〜てもゝさの沖ま時つくるあり此歌なるも汐待

そる事まてよく聞ゆ

○ときをつくる　ときをあいそ（盛衰）卅四二段西北兩門よりおしよせてとつと時をつく

る今井四郎兼平東の門よりせめよせておなじく時を合せたり城中まもかさのでと

くの時をあいそ（同）卅九五段たとへばさゝ朝ま軍ま勝て悅ひの時をつくる是あり後ま

へる勝鬨也　ときのこゑ（平治物）中二一度ま鬨を咄と作りければ云々鯨波ま（トキノコエ）おどろいて云々

ときつくかね　時撞鐘（山家）上「ひるとさる月まあくるをあらましや時つくゝねの

おとあかりせば

ときあるる　時成。成ハ調ふ意也物事の出來ソロフ折を云方まいへり　ときありぬ　ときありて（うつそ樓の上）上五十三

時やう〜ありぬめるいづらおそし〜とさび〜仰らるれば（同國讓）上六十八亥

の時ま御そらへ時ありぬと申そ（同嵯峨の院）百四亥四つと申そまい時ありぬとてささ

ぐま（狹）二下廿六、若宮の五十日の所ま時ありてもちひ參らせ給ふま（同）同四十五齋院ま時あり

て御車よせつれば 補（榮根合）時ありぬと申せどとさまもえおこせ給ハば

ときある人　時めく意の　とき　の所ま出そ

ときあり　時中。半時の意也　ときありをかり（大鏡）四さて時ありをかりありて御そあげ

させ給ひて（同）八藪の中まさふれふ〜てさあゝきまどひ候そどま時なりばかりや

侍りけん後まぞ承ればかもの明神おハ〜まして侍從どのま物申させおも〜けるそ

どありけり 補（嚴島御幸記）たふれふ〜て時中をかり絶入ま〜

ときあらぬ　不レ時（万）十三廿その雨のひまあきゲでとその雪の不時如（トキナラヌゴト）（同）八、五十一「さゲ

宿の非時（トキナラヌ）藤のめづらゝく今も見て〜ゲ妹ゲ忘まひを（宇治拾）七ノ十九む月の事あれど

も藤の花いさゝくをかしくつくりて云々時あらぬ物ハそさまゝきまこれハ云々め

でさうをかーう見ゆ

[とをうつる]時移。時節時刻ゐよ　ときーいふべー[時うつり](伊勢物)十六段世かたり時うつりまければ(源榊)十七時うつりてゐさり顔まおいもるを(同ときー姫)初時うつりて世の中まもー

たゐめられ給ひけるまぎれまに補(宇治拾)七時うつるまでやもめて

○[ときうつり]体の詞也(新六帖)一知家「山寺の時うつりーてふくゐらまねも過ぬとぞおどろかれぬる

○[ときをうつを](盛衰)十七七段時そうつをべきあらねばやゲてもーりゐへりて(つれ〳〵)百廿三段無益の事をなーて時をうつををおろゐある人ともひゲ事をる人ともいふべー[ときうま][をぐれさるうま](和名)十一八駿、穆天子傳云駿馬之美稱也漢語抄云土岐宇万日本紀私記云須久禮太留宇万

[ときのところ]時の所[ときのさゐり]時の。是ら時めく意の[とき]の所まを出を

[ときのゐど]時の程(長秋詠藻)下「ちるゐなる佛の御國めぐりても時のゐどまぞ立ゐへりける(盛衰)五七段消息詞時のゐど立より給へとて云々

[ときのとり]時の鳥(夫)八忠良「五月雨の雲間の月の折ーもあれ身まーむ時の鳥のこゑゐなる(同)同千五百番家長「鶯の入ぬるあとの雲路よりまちつる時の鳥も鳴ゐり[時つ鳥](永久)(散木)上廿九「ときつ鳥おゲぬ雲井まとゞろきて星の林いうづもれぬらん

[ときのくひ][ときのふた]共まを[ときそうを]の所まを出を。[ときのつゞを][時つゐさ]の所まを出を

[ときのま]時の。時のゐどと同く共まを間。ゐどーの間の意也(後撰)哀傷立上朝臣女「時の間もおぐさめつらんさめぬ間ゐ夢またまみぬわれぞゐおーき(源あゐーー)卅「秋の夜の月毛の駒よとゲこふる雲ゐまかけれ時のまも見ん(同桐壺)十六万ゐおゐーつゞけられて時の間もおゐつゐおりーを(同浮舟)卅たゞ此人を時の間忘れぎおゐーいづ[時の間おき](同榊)十五おもひいで聞え給ゐぬ時の間なきゐ(同帚木)四十七おゐーおこさる時のまもおく補(續千)戀三兼季「ちのびつゝたゞ時のままあふゐどのこゝろまよひぞ夢まかもらぬ(拾愚)上「あけぬとて出つる人のあとものあーさゞ時のまゐつもるーらゆき(風雅)春中、後鳥羽院下野「山さくらまされ〳〵てさきーより花まむゐもぬ時のまもおー

[ときのあめ]時の雨。ちぐれを如と字いへる也(夫)十六般富門院大輔「かみな月いゐある時の雨あれゐゐきくもるより物ゐおーかる

[ときのひと]時の人。其折の人の意也(伊勢物)七十九段時の人中將の子とおんいひける兄の中納言行平の娘の腹おり(盛衰)十七七段哥よゝいうおりけれゞ時の人異名まやさ藏人といひけるを此哥世ゐ披露の後ゐ物ゐゐの藏人とぞよばれける

○ときのみかど　時の帝（源やとり木）八十九　あぞ時の御門のかくおぞろ〳〵しき迄むこかゝづき〳〵給ふべき又あらじかし

ときのひと　是い時めく人を云　ときの受領　共ゑ　とき　の所ゑ出も。時の藏人（後撰）雜二　時の上さち部（榮月の宴）卅六。是ら其折の意也

ときのもの　時の物（宇治拾）五　沈地の机ゐ時の物どもいろ〳〵さゞおゝむりるべーさかづきさび〳〵ゑありてこゝい四時折ゑあゐ饗應の物也万ゑいふべー

どきやう　讀經（源若紫）十五　ねふさげあるどきやうのさえ〳〵もでく聞ゆるあど（同榊）四十八　春秋の御どきやうゝさる物ゑてりんゝゐもさま〳〵さふとき事ぞもをせさせ給ひあどーて

ときまつ　時の來る。刻限の時也時節を待也（万）十五　廿　等吉麻都とゑれゝおもへど月ぞへゐける（古）物名きのめのと　「いさゝめゐ時まつ間ゐぞひゝへぬる心ゞせをゞ人ゑゝえつゝ（續後拾）哀傷和泉式部　「露をゝて草ゞの上と思ひ〳〵ゝ時まつゐどの命ありけり　時をまつ（榮花山）卅八　さゞ時をまつもりの御ありさまなり云々　うせ給ひぬ死ぬるきゝゑもいへり

ときまうす　ときそうを　の所ゑ出す

ときあらひでろも　解洗衣（万）十五　廿　（拾）雜上人九　「夕されゞ秋風（拾）衣手さむ〳〵さぎもこゞ等

伎安良比其呂毋ゆきてはやきん　ときあらひぎぬ（万）七卅　「つるゞゝこの解濯衣のあやし〳〵くもことゑきゐ〳〵このゆふべかも（同）十二　十八　「つるもみの衣解洗まつち山云々

ときぎぬ（万）十二　十四　「解衣之思ひみだれてこふれども何の故ぞととふ人もあ〳〵（同）十ノ卅三　解衣の思ひこたきて云々　ときでろも（家持）廿二　（夫）十三　「秋風ゝこと、吹きぬ白妙のこゞときでろもぬふ人ゝあ〳〵（夫）時と人も（新六帖）五　爲家　「あさま〳〵やーづゞゐもとのときでろもふこあらゝれゞ人もこそ〳〵れ

ときめく　時めく。用ゐられ榮ゆる意なり　ときめく人（枕）八　七一　の所攝關の家をいふ　ゐときめく人も云々

ときめく花（重之）九　「春でとゑこすられゑける埋木ゝときめく花を外ゐこそそれ

ときめきー（清愼公）衛門内侍時めきー頃（源桐壺）初　もぐれて時めき給ふありけり

○時めりも　時めりー（源葵）三　古宮のいとやんでとゐくおゞー時めりー給ひー物を（同夕ゝゞ）廿六　かくこことなる事なき人をゐておゝーて時めりー給ふこそいとめざま〳〵くつらけれ　補（枕）一　七　こゝかーこゑよばれとときめくまつけて（うつゞ梅の花笠）ときめき給ふことりぎりゐー（著聞）四十五　後一條院時めりー給ひて

ときゐる　時を知る也（拾愚）上　「ふゞのねゐめゐれー雪のつもり來ておのれ時ーるうき島ゲ原（新葉）春上尊長親王　「花鳥の色ゑも祢にもさきだちて時ーる物ゝかもみゐりけり

（拾玉）六「春の田ゝかへもとゞ〳〵もろれ〳〵きゝ時〳〵る雨の夕ぐれのそら

○時〳〵りがほ（源薄雲）卅前さいどもこそ云々時〳〵りがほなるもあれゝこそとて

（風雅）雜上赤染衛門「思ふことたるとも身ゝれ思ゝぬゝ時〳〵りがほさける花ゝか

○時〳〵らぬ山富士山をいふ（伊勢物）九段「時〳〵らぬ山ゝふゞのねいつとてゝかのこまだら

ゝ雪のふるらん此哥より後ゝ此ふゞ山の名ゝいへるなり（夫）廿三順德院「時〳〵らぬ山ゝ雪げの雲ながら有

明の月のうき〳〵まげ原

ときゝもあれ時〳〵もあれ、此〳〵もいこそゝかゝひて專ゝいふてゝをはなり故ゝ此詞をり〳〵もあれそりこそあれとも同意なり外ニ折モアルの意也大方物事のゝさなりオチアヒシ折ゝいへり、義訓ゝそれば折モ折トテの意ゝ聞ゆるもあり。あれとそへも時〳〵もとのこいへるゝ抄するゝ及ばも

（古）哀傷忠岑「時〳〵もあれ秋やゝ人ゝのよわゝるべきあるをそるたゝ戀〳〵き物を（蜻蛉日記）

中ノ下二例の時〳〵もあれ雨いさくふり神いといさくなるを（源あふひ）廿九ゝのさゝらさび

〳〵くて時〳〵もあれどねざめがちなる時〳〵まれ（顯季）「ゆふつく日いる

さの山ゝ時〳〵まれをりもへてゝく郭公ゝか（同）「時〳〵まれ戀ゝさりけり八日さす

山のも人もかげめすなゆめ時〳〵もこそあれ（蜻蛉日記）上下十三時〳〵もあそあれあなさ

ゝ人のおゝすれば云々、〳〵もとこそとゝさねとゝさねゝよく〳〵つよく云る也。〳〵もあそるてゝをは右の部ゝ出す

補（後拾）哀傷相摸「時〳〵もあれ春のかゝもゝあやまゝぬよものけ〳〵きゝうゝげひもか

〳〵（月詣）三月大輔「時〳〵まれいさくかちりそさくら花うきあるゞのみを〳〵むけふゝ

（俊忠集）「時〳〵もあれも〳〵をされゝるすまのうらゝ日數ふる雨のもをまなきこのな

此詞の例玉緒補遺ゝ多く出せり

○時こそあれ（新葉）冬、後村上院「かげこそる霜夜の月ぞあきをおきて時こそあれとさ

やけゝりける

補ときゝく（万）十八廿八此橘をときゝくのかくの木實と云々反歌云々いやときゝくゝ

なそ〳〵見ゝがそ〳〵（同）同卅八「むつきゝつ春のもゝめゝかく〳〵つゝあひ〳〵ゝそてゝばと

きゝけめやも（同）一ノ八「山越の風を時自見ぬる夜おちぢ家なる妹をかけて〳〵ぬび

つ（同）同十六みよ〳〵れゝ耳我山ゝときゝくぞ雪ゝふるとふとこゝへゝゝゝとこゝへゝゝゝとこゝへゝゝゝ

補 とゆきらうゆき（宇治拾）十六ノ十四　とゆきかうゆきをるやどよ人々ーりよさちて

とめ 留認 とむ の所よ 出モ

補 どめく（榮衣の珠）二郎ぎみ太郎ぎみどめきておもしーて云々

とみ 俗の急。早速の意あり とみよ（三代實錄）十三ノ十七宣命 早爾 罪那倍 不賜云々早速よ也（枕）七十、十うれーき物、とゝよ物もとむるよ見出さる急ニイデ也（源桐壺）一十母君もとゝよえ物もの給ハけ（同横笛）廿かの夢ゞたりを聞え給へばとみよ物もの給ハで（うつを國讓）上七十三さる折もありおんとゝよ參るまゞくおんん早速よ也 ととまる（源桐つを）四十四とゝよもまどろまれ給ハぬ（同横笛）廿一いとゞむゞりてとゝよも打出聞え給ハ孫ど補（枕）十二八只いまめせばとみよてうへ、まるるぞ（源帚木）四十四殿よりへり給ひてもとみよまどろまれ給ハぬ（落窪）一右中弁とゝの事よて出給ふ（伊勢物語古意）云頓の字音也といへどさハあらで疾ゝ速ゝおどの意あるべー

とゝある事（うつを國讓）中六十六三條どのよりおとゞの御せうそこありあらさまあ物ー給へとみある事とあれば云々

とみの事（同）上十七おとゞの君ハとみの事あれどゐてあそばせ給ひつ、兒君を也（落窪）一さうゝより人たづ孫きてとみの事聞えんといへば出さり（古）雜、上云々母のゝこの

もとよりとゝの事とて文をもてまうで來り云々（源タがを）卅二ゥ、るとみの事よい誦經おどをこそハもあれ

○ととの物（枕）五ノ十二これさゞ今ととの物あり云々ときりハさぬひて參らせよ以上

キフナルコ、キフノコ、イソグコ、イソギノ物の意あり

とと 富 とと人 共よ とむ の所よ 出モ

ととのを 鴟尾。どびをととといへるハあ（和名）十一六 尾 だらりよいへる音便也

或云小轅 但和訓ハなー（蜻蛉日記）上下十九車りきをゐてのゝーりてさーわゝる云々いやーりらぬ家の子ども云々あゞえとゝのをの中よ入りこゝて（枕）十ノ十三此藏人よあれる聟の云々忘れよーー人の車のとみのをよ半臂のをひきりけつばりりよてゐゝりーを補（雅亮）車の裝束、云々ひとへうもぎうるもーくかさ孫てひきいだーてとみのをのうへ四寸をりりつまさきをすりーて

ととのをでと 鴟尾琴（和名）四日本琴云々大哥所有ニ鴟尾琴止比乃平古止倭琴ノ首ニ造ニ鴟尾之形也（永久）妓女俊頼「をとめこゞとみのをでとよひれふりてりへを眞袖をーのばさらめやくひ古本

ととくさ 富草（神樂哥）閑野あめおるひをりよりこやひをりとみくさ。もちて（注）富草ハ稻を云也（夫）七、家集人丸「あをよりハそとものの小田よ袖ぬれてとみくさの早苗とりつべらあり

今の人丸集に見えぬ（詞花）雑下大嘗會主基方御屏風に云々家經「打むれてたりくら山まつむ物ゝあらさある代のとみ草の花（枕）四ノ臨時の祭りの云々猶あけてりへるをまつまきんだちの聲ゐてあらさまおふるとみ草の花とうさひたるも云々補（相模集）「こ山あるとみ草の花つこまとてゆるきのそこをふりいて、ぞこ一（同）「わゞやどのとこ草の花つませてゝさりえをひらく身とぞなるべき（同）「さゝのよまたれうゑおりぬ身あれどもあゞつこ見てんとこ草の花此三首ゝ稲をさせり（榮日蔭）「かあやままりさくゑゞさせると死も木のりぬまおひまゝ國のとみくさ

とー敏（心のとさ）（狹）三下。宮まは大將のい御ぞのぬそものこりあう引いれさせ給ひ宮まは大將のひまる所まは

てける御心のとさも限りあくうらめーう云々（耳とき）（枕）九廿八大藏卿ばりり耳とき人あーまことまは蚊のまつげのおつるゆども聞つけ給ひつべくこそありーり

とー疾（古）雑上「とゞめあへばうべもとーといもれけりおりもつれあくぬぐるよもひり（夫）一、衣笠内大臣「くれのこる日數もまさぎあら玉のうべもとーとや春ゝきぬらんこをら年を

とく（源橋姫）冊「御りへり紙のりおゆろげならんゝもづりーげあるをときをこそりゝる折ゝとて云々

とゞ刀自。案ずるに老女をさーていへる事（和名抄）のごとく又りまはーて妻なぞもべてれとなしきほどの女をいへりと思ゝる、さて轉ゞて下臈女房の名になるべー（和訓栞）ゐゝ婦女の通稱也（万葉類林）まゝ貴賤老若一決ーげ、さく見ゆといへり是らゝ次に出ーさる（万）四まは阪上郎女が娘の事をいへる故少女をもいへるとの意なをどそれもれとなーきゆどの娘といへるなるべし此外少女をさーていへるは管見ゐいまだ見及ばず又いにーへゝ御門の夫人を稱ー奉れど後々は自稱にもいひ又下ざまなる女官の名にもなりて貴き人ゐいへる例もをさ〳〵見えず但いへとゞいへとうゞといへるも同意あるべけをばよろーきほどの人まゝいふべくや（和名）二ノ六老幼類

貢俗作習劉向列女傳云古語老母爲貢云々今按俗人謂老女爲召字從自也今訛以貝爲自歟今按和名、案ずるに度之。負の字をとゞと訓んゝ子細おー但順の今按まは負を召まは誤りそれを又二字まわりち訓るりと

いとれたるゝいりまぞや思ゝる（万葉類林）まも論ゞ（和訓栞）まも心得げさーといへり（允恭紀）三いで戸母其蘭一莖戸母此云親自、と慥まは見えさり是も忍坂大中姫いまだ時鬪雜造と申を者のとゞとよび參らせけをとめまて母の御許みおゝーまーける

るを腹だちてふつくませ給へる折の事也（史記）高祖紀常從王媼武貢貰酒（漢書）注如淳曰俗謂老大母爲阿貢師古曰劉向列女傳云魏曲沃貢者魏大夫如耳之母也此則古語謂老母爲貢耳

○母とゞ（万）六ノ卅六妣刀自まとれゝ愛子ぞおんなとゞ（宇治拾）三ノ廿三六十をりりの女ありけるゞ云々子ども孫おど詞あゝれ女とゞゝ老て雀かゝるゝりとてまくこ笑ふ此女の字ゝおんなとありー老女の嫗ゝオウナ女ゝンナ、チ也（万）十六十八くを遠くまれを寫ーあやまれるおるべー

櫛造刀自（催馬樂）眉止之女「みまくさとりりへまゆとゞめ云々（抄）まゆとゞめゝ

女の名也といへる類あるべし

○ふきのとど（万）一ノ十四吹黄負作哥。此ふきといへるハ女の姓おどを稱呼おるべし

○さくさめのとど（後撰）雑五、女の母「今こんといひしをりを命ぜてまつよけぬべし」云々。案そるよさくさめの義未詳但さくさめのとど（僻案抄）よおうとめをいへり

自稱也。以上字書ニ負ハ老母之稱といへる意也（万）八ノ廿二藤原夫人哥明日香清御原宮御字天皇之夫人也字曰氷上大刀自也

○いへとど（遊仙窟）娘子、既是主人母（是ハあるドの女をいふたゞ人也）の妻よもろよむしていふべし以の部よ出いへとうど も音便よのべていへる（万）四、四十九、坂上郎女ゞ娘よおくれる哥物ゞおしらよおもへりし吾子の刀自を（是も娘の年やゝそぐし）（禁秘抄）下六刀自、刀自、御膳宿臺所各別也衣唐衣体也結中俎衣結中着唐衣是一向御膳役者也（同）上廿二刀自持ニ参御膳ニ（枕）七ノ十六臺ぐん所のとどといふもの、云々（榮若枝）四殿うへハ宮〳〵のとどをさめよてもこのそこをたようみさらバ我ある折よとく見んあどおぞしけれバ（和名）二負の次よ専多宇女乎佐女今呼ニ老女ニ爲ニ太宇女ト故次ニ於負耳とそえさり

藹女房の名よなれる也

とし年　としもよし（拾）十兼盛「としもよしてゞひもえさりおくよの里さのもしく

おもおゆる哉年ゆさの豊（年中行事哥合）新嘗會頓乗「いぬる秋をさめしいおぞたむけして年ゆさらおるむどめおりけり補（万）十八卅三「わゞおりし雨ハふりきぬかくしあらバことあげせぞとものとしハさらえん此としハ稲の事也祝詞よ奥津御年とある稲をいへる也

おそきとし（うつお嵯峨の院）九十三かくて年いとおそき年よて三月上の十日バかりの花さらりおり年さむき（續後拾）雑中宗成「あらもれぬ谷の松こそらなしけれ年さむくハとたのミしらども（狭）四下六常よりもあつさ所せき年よて（蜻蛉日記）下中八かそおの月例の年よりも時雨ゞちおる心おり

○いよし年　こん年來年也　あまさの年　おおくの年のたぐひ上の詞の部よ出ス　いくとせ幾年　いくとし月

是以の部よ出ス　あくる年明年也　年のあくるの所附ス　元年□十一年おど音よていへり。かおの草紙よも年号をいへるハ□。

三とせ　四とせおどとせの所よ出ス

とし年甫年甲のとし（源夕顔）四十六年齢也　としハいくつよる物し給ひし（榮月の宴）四十八御年

十一おり年といえでさゞ七つよおる（枕）二ノ十七そこし年おどのよろしきおどこそよ十よあまるなどもいへり十さとハさらりの過ざるまだ乙らきをいふ　年さらき（枕）五六年さらき人の云々年のおど（源榊）十三御年の年どよりハおとおびうつくしき御さまよて（同若紫）卅六御年よりもわらびて（蜻蛉日記）下上十三年よりもいとちひさく年足らぬ（源東屋）十一いさけおく年たらぬおどよお

もれとも年くゝる（源葵）五十御とゝのくもゝるけはや物々しきけさへそひ給ひて年まさる（濵松）三こよなく年まさりけれゝ年ウヘなるをいふこゝ北方の年ウヘなる也年をぐゝさる（枕）六ノ十五あたれなる物年打をぐゝさる僧たちの行ひゝさるこゝ老さる也をぐゝをこゝ（源桐壺）ゝ源十二才葵十六才なるをそこゝすぐゝ給へるをどゝよといへり年老たる（枕）二ノ五人ゝあなづらるゝ物年おいさる翁余此とゝ云々二樣ともゝあの順ゝ出そ年まゝりいる（源ゝゝゝあ）上七年まゝり入りておそやけゝもつゝうまつり侍るあひさ云々。是も年たけたる也

とゝゝ年ゝ。年毎ゝの意也（万）十九二十「藤なみの花のさゝりゝかくゝこそ浦こぎへつゝ年ゝゝぬゝめ（千）春上公光「皆人の心ゝそむるさくら花いくゝそとゝゝ色まさるらん（古）春上「あだなりと名ゝこそたてれさくら花年ゝまれなる人も待けり（後拾）春上源縁法師「春でとゝ見れどもあゝゝ山櫻年ゝや花の咲まさるらん（好忠）八月中「望月の駒をら年ゝひゝる、をゝゝ過ゝくる秋ぞゝなゝき（堀川）時師「まだゝらゝ氷きえせぬ氷室山夏といふ事をとゝゝありとゝ（同）仲實「わさゝ守舟よどみをなたなゝゝさのとゝゝあふ夜ゝさゝゝこよひのゝ（古）秋上興風「ちぎりけん心ぞつらきたなゝゝさのとゝゝ一さびあふゝあふゝゝ

とゝゝゝ鳥柴。柴ゝつけさる鳥（ホノヽヽ、定）家「くれてゆくとゝゝの雉をあらさまの春やさくらの枝ゝつけまゝ補（新續古）十七詞書云々雪ゝ朝とゝゝゝ雉をつけて

○とりちゝゝ同（夫）五仲正「つれもなき人の心をとりゝゝゝこゝ孫のきゝゝにつけえてゝゝゝゝな

とゝへぬる年ふるの所ゝ出す

とゝゝゝあもを年ゝ合ぬゝて年齡不相應の意也（うつを）とゝ蔭）ふみもよませをいひをゝふる事もなくておそゝさつるゝ年ゝもあゝをたけたゝくかゝこゝ幼ゝい（枕）九ノ五いと今めゝゝゝう身のほど年ゝゝあゝにかゝらいさゝ（抄）清少今卅才ゝゝりゝや

とゝをかぞふ年と數ふ（新千）別、九條右大臣「たけくまの松ゝいく代ゝへゝけると年をゝぞへてゝへりあゝなん

とゝをゝさぬ年を重ぬ（山家）上「卯杖つゝ七草ゝこそ出ゝけれ年を重て摘るわゝゝゝゝ

○とゝのゝさゝる（源若紫）廿四とゝのかさゝるゝそへて御心のへだてもまさはを

とゝをつむ年つもるの所ゝ出そ

とゝをこむる

とゝをこめて夜をこめての同く年ノ内カラの意也（拾愚）上「春きぬと霞ゝいろゝ見それどもとゝをこむるゝ梅の初花（同）同「宿でとゝ春のかそみをまつとてやとゝをこめてゝいそぎたつらん

とゝをそぐ　年を過す（宇治拾）四ノ九　おそくの年をそぐゝてさびゝと思ひゐるさるゐどま

とゝりもる　年替る。改年の意也（榮花山）五　もりおく年もかもりぬ貞元元年丙子の年といふ（同）十　かくて年もりぬりぬ是ゝさゞの年也改元故よいへるまあらぞ（源榊）四十三　年もりもりぬれば

とゝりへる　年返る。是も改年の意也（同）十同　五年りへりぬをど（同葵）五十一　年もりへりぬついたちの日ゝ（後拾）春上加賀左衛門　「あさらゝき春ゝくれども身まとまるとゝゝかへらぬ物まぞありける」よとひをりねてよめり

かへる年（枕）四　りへる年の二月廿五日にまあくる年同ゝ

○**とゝさちりへる**（拾）春せい　「あら玉の年立りへるあゝさよりまさる、物ゝうぐひすのこゑ

とゝよもひ　年齢。たゞりさね（濵松）四　年よもひ位のきもまさあさもりま（かけろふ日記）下上八　今ゝまゝてかゝるべきとゝよもひまありぬくを（源行幸）十七　とゝよもひまそへていまゝへの事おん戀ゝりけるを（同竹川）四十五　とゝよもひのゐどゝりさゝならねど人まおくるとおげき給へり

とゝよる　年寄る。俗のごとく年老さる也

とゝより（散木）上廿五　「卯花の身のゝらげともミゆる哉賤げかきねゐとゝよりまけり（著聞）十八　年よりさる侍一人來りければ（つれ〳〵）百五十二段　年のよりさるま候と申されけを

○**とゝより**　体の。老人の意語。今と同（つれ〳〵）百十九段　つをの段ま鎌くらの年よりの申侍りゝゝ云々

とゝたりき　年高。よもひの高。つもる也（古）長哥忠岑　身ゝいやゝくて年たりき事のくるゝさ云々（永久）仲實　「色りへでふりぬるものゝとゝさりきとおりの松とされとおりけり

とゝたりく　（うつゐ藏開）中廿　御とゝたりくおりぬれば御よもひ今いくばくもあらぢを（同國讓中四）大きおとゞゝ御年たりくおり給ひまけきば（後拾）冬公任　「降雪ゝ年ととままぞつもりぬるいづれりたりく成まさるらん（狹）四下一　年たりうおり給へるおゐいまうち君の

○**とゝさけて**　同（白文）十六十五　叔母年高新婦貧（同）十五少睡知年長（拾玉）四　「引うゑゝ木々の梢まとゝさけて宿もあるドも老まける哉（風雅）雜上家隆　「おゐろまもむりゝのりげゝおりけり年たけてこる春の夜の月

補（新古）旅西行　「とゝさけてまさこゆべゝとおもひきやいのちおりけをさよの中山

とゝつく　年盡（源幻）廿四　「物おもふとをぐる月日もおらぬまとゝもさげ世もけふやつきぬるとゝのつくるあ（玉）雜一待賢門院堀川　「世そうらミ身をおげきつ、あけくれてとゝも心もつきをてまけり

とゝつき　年月（万）十一廿一　（拾）戀二人九　「あひみていくひさゝくもあらぬまは年月のでとおもゐゆるりも（拾）ひさ、ゝ　ねどもりあ

とーつきゝさある（源氏のり）初 年月ゝさあれゞ 年月ふ 年月ふる（續古）別 惠慶「さゝるれどかげをゞそへつまをゝゞみ年月ふとも思ひ忘るゝ（源末摘）初 とー月ふれどおゞー忘れゞ 年月をへ（竹取）此人々の年月をへてかうのゝいまーつゝの給ふ事を 年月過（榮月の宴）卅六 ゝゝかくとー月も過て 年月をすぐゝ（源浮舟）五十世ゝ似ゞあらまーゝ所ゝ年月を過ー給ふを 年月をゆく（同手習）四十二 ゝへるゞーとー月をゆきてさまさゝゝたづねよりて 年月をおくる（宇治拾）四ノ十四 とー月を送りさるあひた云々

とーつもる 年の積る也 よもひ也（後拾）秋下 資通「年つもる人こそいとゞをーまるれけふをゝりある秋の夕くれ（狹）四下 卅四「年つもるゝるーことゝるけふよりハあハれをそへてうきハさすれぬ（同）四上 十七 何事も世の中ゞゝり思ハゞゝる物ハ侍らざりけりまいてこれよりとーつもりぬる人いゝゝあることを見侍りぬらん（新拾）冬 資季「いさづらゝ過行物と思ひてーとーの何とて身ゝつもるらん

○つもれるとー（古）長哥 忠岑 つもれるとーをーるせれゞ五つの六つゝありゝけり

○とーをつむ（新古）春上 俊成「澤ゝおふる若菜あらねどいさづらゝ年をつむゝも袖ハぬれけり（公忠）「行ゝへり舟路ハいさくあれゝけり年をつみてぞもこゝぶべらなる

とーあゝ 年のあゝゞをいふ（伊勢集）十 六月ゝもらへゝる所ゝ云々。年中 繪の哥也「とーあゝゝ

われゞなげきハおりゝけりよゝゝそぐとゝうせゞとぞ思ふ（とりゝへもや）四 いとひさーくあやゝ給ふとて春宮ゝもまるらゞとーなゝもりもこもりたりーも云々

とーあみ 年次（式子内親王）「年あゝのゝさある事をおどろけゞよあ〳〵袖ゝそふ氷ゝゝあ（夫）一 慈鎮「池水の氷ゝやどるとーあみをかぞふるものハ春の初風（永久）元日 忠房

「うちあびきけふ立ゝへる年あゝのよらぬみぎはハあらゞとぞ思ふ

○いく年あゝ（夫）廿六歳 暮俊成「けふでとゝ幾年なみを過ぬらんつもりの浦の濵松の岸

とーのむ 毎年を（万）五ノ十七「得志能波爾もるのきさらゞかくーこそうめをかざーてたのーくのまめ（同）十九 十六「毎年ゝきあく物故郭公きけゞーぬゞくあハぬ日おゞみ（同）六ノ十「毎年かくも見てーゝみよーの、清き河内のたぎつ白波 いやとーのむ（同）十ノ十一「春霞さつ春日野をゆきゝへりされハあひゝん彌年のむゝ（夫）知家「君ゞさめのべのゝら雪打ゝらひいやとーのむをつむゝゝあゝな 補（万）十八 ゆきかゝる年能波其登爾云々（同）十九 十二 毎年爾註云毎年謂之等之乃波（同）廿二 いやとーのむゝ（同）十七ノ 卅六 二ッアリ（同）四十モニ（和泉續）「年のむゝおひそふ竹のふーでとゝつきせぬさけのよをぞこめさる

とーのむゞめ 年れ始（古）大歌所「あさらーき年のむゞめゝかくーこそ千とせをかねて

さのしきをへめ（續紀）十四「新年始邇何久志社仕奉良米万代摩提丹（催馬樂）にちさへるゝ（續紀）に同（清慎公）「あさらしきとしのむかへと思へどもとまらぬ物ゝ涙ありけり

としのを **あがく**年の緒長、年久しき意也年の長く打つゞくを緒といへるなり（万）四卅「さかさみ見つゝしのびせあら玉の年之緒ながくされもおもむん（同）十五廿七「あら玉の等之能乎奈我久あゝざれどけしき心をあげもゝなくゝ（古）秋上躬恒「たゝもさゝらしつる糸の打もへてとしのをながく戀やさらん（新古）賀（夫）八「ときもなる松はかゝれる苔（新古）イなれ本藤ゝとしのをながきゝるべとぞ思ふ（夫）廿九順德院「ちぎりてもとしのをながき玉つをき陰はゝ千代の數ぞこもれる**補**（万）廿ノ十一「霜の上はあられたもしりいやましはあれゝまるこむ年のをながく（同）同十云々年のをながく（同）十九三モ（同）十二あら玉のとしのをながく（貫之集）「糸をのこさえゝよりつる青柳を年のをながきゝるしとぞ思ふ（續古）賀躬恒「千世をふる松はゝゝれる苔なれゝ年のを長くなりはける哉

としのをゝり年の終年の果（古）冬年のもてはよめる元方「あら玉のとしのをゝりはなるでとゝ雪もさゝ身もふりまさりつゝ（狹）四中廿二としのもてはなりてぞわさり給ひける（惠慶集）年のをゝりは暦の軸もと迄まきよせたる心人々よむは

○**としのもて**共に十二月をいふ（源わかな）下九十九「霜月ゝこゝらの御忌月ありとしのをゝりもさ物ささぐし

としのさより年の渡の。年ごとの渡りの意也彦星の上にいへり（後撰）秋上「玉ゝづらたえぬ物ゝらあら玉のとしのさよりゝさゝ一夜のこ（新後撰）秋上爲子「ふちゝせはかもらぬそども天の河としのさよりのちぎりはぞしる

としのゝこ年の神（好忠）四月中「こあれひくかものことしろひきうゑて今もさとしの神をいのらん稲を守まも神をいふ

としのゝぎ年の數**年の數そふ**（源紅葉賀）十一紫れ君の事をさゝいへど御としの數そふゑるしなめりゝし（同竹川）七「年の數そふまゝはは内參りより外のありきなどうひ〳〵しく

なりはて待れゝ**年の數つもる**（同）初年の數つもりそけさりける人のひが事はや云々

としの數をつむ（拾）賀伊勢「春の野の若菜ならねど君がさめとしの數をもつまんとぞ思ふ

としのうち年の内。一年ガアヒダ年中をいふ（拾）春（菅万）「年の内ゝ皆春ながらくれなゝん花見てだはもうき世をぐさん（菅）そぎなゝん花を見てだはゝ心やるべく

としのうち年の内。是は俗と同く冬の末に意也いふはとしの内の意也（古）春上元方「としのうちは春ゝきはけり一とせをこぞとやいはんことしとやいはん（枕）四廿四、雪山の事を「としのうちつもり迄も

あらゞとのみ申そ（十二月の中旬ふるさる也）（續古）雜上前太政大臣「雪ふりき山ゝをめる色もなし
としのうちなる春のあけぼの
としのくれ（年の暮）（續後撰）冬西園寺入道前太政大臣「思へどもゝひあきみつのわさし守おくり
むゝふるとしのくれ哉　としのくれ方（源總角）九十四「年のくれゞさまゝかゝらぬ所だ
まそらのけしき例まゝ似ぬを　としくれ方（壬生）下「たのむまも心ゞそきゝあら玉
のとしくれゞさのあり明のそら
○としくるゝ（年のくるゝ也）　年くれて（夫）十八、千五百番嘉陽門院越前「年くれておくりむゝふる人で
とまいづれをいそぐいそぎあるらん　年のくれぬる（拾遺員外）上「みな人の春をむ
ゝふる心こそとしのくれぬるけしきなりけれ（千）冬公光「さりともとなげき〳〵て
過しつるとしもこよひまくれもてまけり
としのこなさ（年のこなさ此方。内の意也）（後撰）冬「いつしゝと山のさくらもわゞでとくとし
のこなさまゝ春をまつらん（同）賀貫之「いもふこととありとなるべしけふあれどとしれ
こなさまゝ春もきまけり
補　としのこひ（万）十八卅四「やその川こむゝひさちてとしのこひけなゞき子らゞつま
とひのよそ

補　としのあるゞ（万代）（忠見集）「春霞たつといふ日をむゝへつゝとしのあるゞと
われやなりなん
としのあくる（年の明る）（山家）上「あさらしき柴のあみ戸をたちゝへてとしのあくるを
待さるゝな（玉）雜一前關白家ひご「山里の柴のとゞそゝ雪とぢてとしのあくるもあらじ
やあるらん　あくるとし（源桐壺）廿あくる年の春坊定り給ふまも
としのゆく（年の行く）（千）戀二教長「いゝもゝり戀路ゝ遠さものなれゞとしゝゆけどもあふ
せあゝらん
としのゆきゝふ　とし行ちゞふ（惠慶）つごもりの夜年の行ゝふ心人くよむま「ふる
雪まゝをみあひてやいさるらんとしゝゆきちゞふよもの大そら
としのゆき（年の雪）　年ごとの雪也髮に（後拾）冬明衡「白たへまかしらの髮ゝおりまけ
りまゞ身まゝ年の雪つもりつゝ（拾）冬忠見「雲のゐるこしの白山おいまけりおゞくの
年の雪つもりつゝ（是ゝ多年とまゝされゞ聞えやもし）　補（拾）屏風まゝ（能宣集）「あさらしき春さへ近
くゐりゆけゞふりのこまさるとしの雪ゝな
としの三とせ　としの四とせ（などの次の）　とせ（の所ゝ附そ）
としふる（年の經る也）（後拾）戀一左大臣「されゞ身ゝとゝへる鷹とおりまけりとしゝふれど

ももとわ忘れぞ（拾）戀一「おくれよも雨よもあらで君こふるとしのふるよも袖わぬれけり（大和物）「大ぞらわくもらぬながらかみな月（下ノ句拾と同）

○とゝとふる　へぬる（竹取）かく此國よわあまさのとゝをへぬるよおんなありける

○なやへ　又ふの部あわせみるべし

とゝふる　年を經よわひをかさねる意也　とゝふる人（古）春上さくらの花のもとよて年の老ぬる事をおげきて云々「色も香もおなじむかしよさくらめどとゝふる人ぞあらざまりける

とゝへぬるどち（源玉かつら）卅猶とゝへぬるどちこそ心わかわてむつびよかりけを

とゝへゝる人（同胡蝶）十六とゝへゝる人のいとう紅びをぎたるを云々

とゝふりき　年深（白文）廿五、四代鶴飲啄雜雞群年深損標格。此ふけてと點し。たけての例よて俗たると同意也

のでとく　ふけて　ともいふ（万）三ノ卅七「いよゝへのふるき堤わとし深ゆ池のなぎさよみくさおひよけり（同）六、四十一「ひとつ松いく代かへぬるふく風のこゑのそめるわ年深かも（源わかな）下十一おやきおとゞ致仕の表奉りて云々とゝふりき身のかうふりをかん何かをしからんとおやしの給ひて（風雅）雜中公蔭「とゝふりゆ杉のこすゑも神さびてこぐらき森わ宮ゐありけり

とゝでろ　年頃（万）二、卅一「朝日てるさゝの岡へよなく鳥の夜あきかたらふ此年己呂を源桐つぼ）六年でろ常のあつゝさよあり給へゞ御めあれて（同若紫）四十とゝでろのよもきふをかれあんもさにげよ云々（同）四十一とゝでろよりもこよあくあれまさり云々（枕）七、十とゝでろよありぬるとくいの云々

とゝでろふる（伊勢物）廿三段とゝでろふるやどよ補（著聞）十六十八とゝでろの中間をとこよ

とゝでと　年毎（枕）七、廿一少將といひける人の年でとよ舞人よて云々（古）秋上躬恒「とゝでとよあふとわそれどたあをゝのぬる夜のかゆゆぞそくありける

とゝこめる　年の越る也（竹取）よるひる待給ふよとゝこゆる迄おとゞもせぞ（拾）春紀文鞍「春霞さてるをそれゆあら玉の年わ山よりこゆるありけり（後撰）雜四「まつ人わきぬときけどもあら玉のとゝのゝこゆるあふさかの關補（貫之）「さゞやどよふるゝら雪を春よまゝとゝこえぬまの花かとぞ見る

とゝでもり　年籠（後拾）春上とゝでもりよ山寺よ侍りけるよけふわいかゞと人のとひて侍りけれゆよめる能宣哥云々（夫）十八信實「老らくよかくれんと思ふゝめの内のとゝでもりをゆあれとも見よ俗よいふと同

とゝでひのまつり　祈年祭（江次第）五、廿四よくわゝけ、よのせず（令義解）二、神祇令仲春祈年祭欲令歳災不作時令順度即於神祇官祭之故曰祈年（年中行事哥合）祈年祭秀長「いのる

てふとしのゝ長き君が代をことせあまりの神やうくらん判の詞大神宮以下三千七百卅二座の神を祭りて年災をいのり申さゝ、故は年こひの祭と申侍り云々（公事根源）云々周禮は祈年ハ豐年をもとむる也とこゝえさり

とゝある 有レ年ゝて豐年をいふ **とよのとゝ** の所は注す（新六帖）五知家「民の戸は秋をさめするいゝ」ばりとゝある御代をゝけてゝるらゝ（拾愚）中「君が代ハたれもゝゝゝまのいちゝ」るく年ある民のあまつそら哉 **とゝあれば**（夫）卅光明峯寺入道攝政「とゝあれば秋のくもな」れいゝむしろ云々 **とゝゆさり** **とゝ** の所は出そ

とゝあらさまる 年改まる（源浮舟）六文詞「とゝあらさまりて何事りさふらふ」

とゝぎ 年木（夫）十八歳暮、後九條内大臣「たりゝまのそま山川の筏師ハいそぐとゝ木をつみやそ」ふらん 是ハ春の用意は薪を（袖中抄）十六、かつゝりゐせの所はいへる こりつむ事也とぞ 年木ハ春の事はて是とハ異なり

とゝぎり 年切（後撰）雜一の（抄）樹木の花實をいふ也 無官を比ゝていへり又（同）雜二の（抄）にハ木實のそくなくなる年を年切といふといへり眞淵ハ年ぎらひ也といへり（同）雜一紀の友則まさつりさたまハらざる時事のついで侍りて年ハいく らばりはりありぬると問ひ侍りければ四十余はゝんありぬると申ければ贈太政大臣「今まではゝどりハ花のさりぎゝてよそとせあまりとゝぎりハそる（同）雜一三條右大臣身まりてあくる年の春大臣召ありと聞て齋宮のことつりハゝける 娘の女御、右大臣の女也「いりでりの年ぎりもせぬさねもゝげあれさる宿はうゑてこるべく（大和物）三ハ初句ひのでりく下の句あれさるはたのりげとたのまん りの女御左のおやいまうち君はあひはけりと聞てつりハゝける 齋宮の「春でとは行てのこ見んとゝぎりもせぞといふさねハおひぬとりきく（大和物）三ハかくて孫がひ給うけるりひありて左のおとゞの中納言ことすみ給ひけをゞさねこをひろでり給うてかげおやくありはけりさりける時齋宮より「花ざりり春ハ見はてんとゝぎりも云々下句。此詞は哥の意明也同（後撰）雜三法皇りへりこ給ひけるを後々ハ時おとろへありゝやうはもあらぬありはけきゞ里はのみ侍りて參らせけるせがゐの君「あふことの年ぎりゝぬるかげきはハ身の數からぬ物はぞありける（永久）經年戀兼昌「あふことをとゝぎりゝさるとゞ身りか花さきゞされ物からあくは

とおきこ **おきみ** 閾。門の古きこ也（和名）十、十二爾雅注云閾門限也兼名苑云閾一名閫和名之岐美、俗云度之岐美（枕）一白馬見んとて里人ハ車きよげはこゝさて、見はゆく中の御門のとゞきこ引いる、ゆど云々

とおきこ 軾。是ハ車の具也（和名）十一外六軾說文云軾車前也和名車乃度之岐美（枕）十一廿六さゝぬきのかさつりさハとゞきみのとはふこ出されたるゆど道は人のあひさらばをりゝと見つ

べ〜

とゝミ（精進の後ゝ魚をくふ。俗の精進事也契沖ゲ説ゝし）。（蜻蛉日記）中下十五 とゝミあどいふ。（めカ）れどわれいたやうゞあり（同）同九 いゝゝゝぞもやとゝミをこそ〜給ひてめ（落くゞ）一、北方石山詣のるすの所あこき詞 ひきゞ〜おどやのこりさるをこ〜給へといへゞみづ〜のあないとゞ〜云々 かへらせ給ゝん料ゝ今をこ〜あらんといへゞあこき詞 ゝへり給ゝんゝゝ御とゝミをぞ〜給ゝん

とゝみのまうけ（蜻蛉日記）上下十九、初せゝ ゝへる所ゝ とゝミのまうけありければゝう物をるゞど云々

とゝミの事（落窪）二 大納言殿御とゝミの事あどいといゝめ〜う〜給ひてゝべり給ひぬ（うつゞ藏開下五 卅 まづ御とゝミの事をせさせ給ひてその法服あどの事ゝ夏秋ゲゝも〜給へ（源少女）五十一 とゝゝへりてゝまゝて此御いそぎの事御とゝミの事樂人舞人のさためなどを御心ゝいれていとなみ給ふ

とゝミの日（源わかな）上、六十三 院の御賀ゝさゲの、御堂ゝて藥師佛供養〜給ふ云々 廿三日を御とゝミの日ゝて云々 二條院ゝてその御まうけゝせさせ給ふ 補（うつゞ菊の宴）三 君ゝ御とゝミのことをこともなどゝ御らんせさせよ。玉勝間ゝも説あり考合べ〜

とゝひさゝ（年久ゝ（夫）卅三 顯季 「とゝひさゝゆむ」の帶をとり〜で、神ゝぞまつるいもゝあゝんと

とび（問て飛てなど）**とふ**（**とぶ**の所に出す）。鴟（トビ）の尾鴟（トビ）の尾琴。是ら**とみのを**

とみのをでと

といへゞかの順ゝ前ゝ已ゝ出す

とび（鴟（和名）十四 八 本草云鴟一名鳶和名止比 爾雅注云鳶一名鴟（クソトビ）漢語抄云久曾止比（枕）三 十 とび烏などのうへゝ見いれ聞いれなどをる人世ゝなゝ〜ゝ〜（盛衰）十二、四段夢ゝゝえ給ふ崇德院の御さまと御まなこゝとびの目ゝ似させ給へり

補

とびのを（車ゝあり、とみのをの所ゝ出（著聞）九 車をゝよせけれゞ云々其時とびの尾より越入ゝけり

とびら（扉（和名）十、十三 說文云扇和名止比良 扉門扉也（字鏡）闔門乃止比良（神代紀）下 三 廿 闥（トビラ）（宇治拾）五、十三 門の關木をもづ〜て扉ゝさつ方を人ひとり入るゞどあけさり（夫）卅四 般富門院大輔「くもりあきるりのとびらゝさく花ゝおくれぬゝゝげの色ゝぞありける

とも（友（源明石）十 さゞゆくへあきそらの月日の光りゞゝりを故郷の友とあゲめ侍るゝ（山家）下 「さゲ園の岡べゝたてるひとつ松をともと見つゝもおいゝけるゝあ（新續古）雜中、後小松院 「なゞふゝく思ひもいらゞ山ざとの友をもそつる世とやありなん

友ゝて（濵松）三 心ひとつゝおきふ〜あゲめつゝ手ならひを友ゝてあゝ〜くら〜給ふ

友よぶ（新千）旅、後さゲの院 「風あらきむ〜あけのせとの夕やゝゝ友よびゝもれよゝの舟人

ともあき宿（玉）秋上 爲實 「たれゝゝゝ秋の心もうれへまゝ友あき宿の夕ぐれの空

（千）冬「ふる雪は軒もの竹もうづもきて友こそかけれ冬の山里」友がゐ（夫）二、喜多院入道二品の「とものがゐは鶯をりりれとづれて霞はむせぶ春のやまざと

。友鶯（夫）二。友千鳥友かゝ千鳥友鳥（八雲）。友むれ鳥（夫）。友猿（月清）。友鶴

是ら抄する。友よぶ千鳥又こと鳥よも及べをいへり

とも供の意俗と同繼躰紀十四從者（皇極紀）三從者（トモビト）ともは（トモビト）ともて（後拾）旅父の供はて。季吟本遠江の國は下りて云々（狹）四八中兒君を供はてさうゞよりこあはざまゐあるさりいで給ふは云々此具ゝ給へる兒君ゝ云々ともの人（源玉かつら）廿二ゝさこは供の人のあゝと思ふべければ（宇治拾）七二十供の人々手まどひをゝてともある人（源浮ふね）六十八ゝげ沓をもりせてこづゝらゝ供ある人のあゝき物をもきさり御とも御供は（かけろふ日記）九中上みさけはとていそぎたつをさなき人も御供はとてものそれば

御ともは（源さゝき）卅五御供はもむつまゝき限りゝておいゝまゝぬ御ともはて（源若紫）八惟光をりり御供はてのぞき給へば御ともはゝ（同桐つゞ）二弘徽殿おどもはさらせ給ふ御供はゝ源やげてこその内はいれ奉り給ふ御ともの人（同浮舟）卅五御供の人も云々。供をそるをも供はするをも供ふ供はてといへり補（宇治拾）二ノ廿三ともはまうでことばかりいひけて云々ともは行ゐどは

○ともゝて（盛衰）十四四段競も供ゝて行けるゝと見せらる云々いゝは供をばせぬぞ（同）十二六段御供をも仕れゝゝ云々

とも是も同意也俗のッレの意也ともはある（古）旅但馬の國の湯へまゝりける時は云々ともはありける人々云々（同）同ともは侍りてよめるともはよばる（拾）雜秋殿上のをのこども嵯峨野はまゝりて侍るともはよばれて元輔

○ともゝて（枕）一六、あふひ祭の折のわらゐの事をいへる所はおやおなその女姉おどの供ゝてつくろひありくもをゝゝ是ハサシソヒ後見する意也

とも鞆（和名）四二蔣魴切韻云鞆音旱有臂避弦具也和名止毛楊氏漢語抄日本紀等用鞆字俗亦用之本文未詳

とものおと（万）一廿八「まそらその鞆の音をゝり物部のおゐまへつ君楯たつらゝも

左臂は著て弓弦の觸れて鳴る音を高うらゝめん。さめ也音を以て威を事鳴鏑おどもおなどとず

とも艫へは舳の所。ともてはをはいはの所は附そ

ども共。等の意俗と同。等の字を（万）は附そ

（源若紫）四十六あやゝきふる人どもの侍るは云々をのこども（拾）雜秋殿上のをのこども親どもも（源蓬生）七親どもゝまうでかよひゝをと思ひて娘どもの（同）八ゝげ娘

どものつゝび人よあ〜て〜げあ妹ども（同帚木）八ヒゲいもうとどもの聟どもを（落くゑ）二思ふやうある聟どもをもとる哉四位ども（同帚木）七非参議の四位どもの受領ども（同蓬生）四受領どものおも白き家づくりこのむゲ犬ども（同浮舟）六十八さとびさる聲〜たる犬どもの出來ての、〜るもいとおそろ〜く鳥ども（更級日記）五十一池の鳥どもの虫ども（後拾）秋上長恨哥の繪よ云々虫どもあき草もられぬさりて云々馬ども（蜻蛉日記）中上廿ゑた〜馬どもやそめんとて車ども（枕）二ノ十九車どもの方あど見おこせて舟ども（伊勢物）六十六段あぎさを見れバふねどものあるを見て木ども（枕）三五花の木どもちりもて、云々（同）同六よ本どもこそあれ家どもを（蜻蛉日記）上下十六柴垣ゑヒさ〜てある家どもをこるよへいども（源をとめ）五十五塀ども廊あどを御ぞども（源帚木）八白き御ぞどもの小うちぎども（狭）三下四十一書ゑそあゲこうちぎどもを法文ふこども（うつゑ櫻の上）下卅三ゑうもんふこども、侍り哥ども（枕）一廿三歌どものもとをおゑせられて扇ども（同）五ノ十二たまいをる扇どもの中よ云々補（枕）九廿四草紙どもあどいれてもて行こそ

○事ども（源帚木）十九よくげある事どもをいひもげまゝ侍るよ人の上ども（同）九さま〜の人のうへどもをかさり合せて云々心くらべども（源ゆふゑ）四十三あいあゝりけるこゝろくらべどもゝあ

○子ども今と同（落くゑ）一父君詞子どものふるきぬやあるきせ給へよるいゝよさむゝらん（枕）二四おとあなる子どもあまさようせぎいうまであどももひありきぬべき人の親どちの云々（同）同八子どもヒらいべあどを云々（万）一廿六「いざ子等（コトモ）ともやまとへ是いの船中の諸人をいふ子の事ゐあらず猶あり皆ヒ君より下ざまの諸人をいへる也

ともよ共よ。俗のイッ（万）十二廿一「あさあさな草のうへ白くおく露のきえバ共よといひ〜君いも（新六帖）五知家「いゝゞせんゑあゞともよあらぎいも（古）春下「散花を何ゝうらみん世の中よわゲ身もともふあらん物ゝい（同）秋貫之「川風のすゞ〜くもあるゝうちよにる浪と、もよやあきいさつらん（金）雜上經信「神垣よむゝ〜ヒゲ見〜梅の花ともよ老木とおりよけるゝな（伊勢物）十二段女をバとりてともよゐていよけり御ともよゴイッヨニ也御ともよおりよけれバ云々

補ともゞ〜（貫之）「ともゞ〜とおもひきつれどかりゲ孫いれあさゞとへもかへらざりけり（後撰）「そむゝれぬ松のちとせの不どよりもともゞ〜とさよおさもれぞせ〜ゝへし「ともゞ〜とおさふ涙のそふ水いいゝある色よ見えて行らん（伊勢集）川みつい、

いろゝーて
あゞるらん

ともとをる 友と爲也 ○(古)のゝ宣長云ツレニスル人也又スル意也 **ともとをる人**(古)旅あづまの方へともとをる人ひとりふさりいざあひていきけり **ともとをるは**(つれ〳〵)上、百十七段 友とをるはさるきもの七つあり云々

ともかゞみ 友鏡(後撰)冬雪の朝老をかゞきて貫之哥云々かへ〳〵兼輔哥云々又貫之「黒髪と雪との中のうきされバともかゞみをもつら〳〵とぞ思ふ(袖中抄)さゞ髪人の髪の白きを雪は見合せさる也

ともがら 輩(字鏡)儕輩類也疋倫也比也止毛加良又太久比(文選)七一、西都賦 **種別摯分**(クサレトモガラレヲ)(同)十九一、四

屬又倫をよめり(源あゝ〳〵)五ふゝき御うつくしさ大やゝまはあまねくしづめるともがらをこそおそくうゝべ給ひしゝゝ補(うつを俊蔭)一七ともがらとそろゞして一人ちらぬせゝいはたゞよひて

ともがき(神代紀)下三朋友之道理。此ともがきといへる詞ゝおものがたりなど ゝゝ管見ゝゝをさ〳〵見およばぎ

ともゝくも **とかく** の所は附そ

ともだち 朋友。きんだちのさちは同くひとり(和名)の古本論語注云同門曰朋同志曰友の友をも友だちといふべし 和名度毛太知(落くを)一詞さちもきの友さちおんよべ物いもんとて來りしと云々(古)別友さちの人の國へまゝりけるは云々 **ともさちまて**(源東屋)卅四たいふおどのさゝくてのころ友さちはてありける人ゝ **よき友さち**(うつを吹上)下あるゞの君ゝく面白き所はいきをひあるすまひゝ給へどよき友さちは逢給ふ事此さびおれバ **友さちとおる**(うつを菊の宴)下卅五行末はも草木鳥けさものとおるともを友さちとこそならめといひちぎりてをみさは給ふは **友だちども**(伊勢物)十一段むゝ男あづまへ行けるは友だちどもは道よりいひおこせける **友だちの女房さち** 友とをる女官たち也(枕)十二友だちの女房さちなどゝゝ〳〵來つゝ云々 **女友だち** 友とをる女をいふ(古)雜下女ともだちと物語してわゝれて後はつゝゝもしけるをちのく(後撰)春下雜一おどは見ゆ皆女どちいへる詞おゝりなを **を** の部は也も出そ

補 **ともづれ**(小侍從)「ともづれはこしゝ其ゝをもさらぬしておく〳〵今やゝへるゝりがね

ともづな 纜(和名)十一四考聲切韻云纜維舟索也ハツナクテ度毛都奈(後拾)別巳勢法師「おでりある命と思ゝゞともづなのまはもやくるとまはまし〳〵物を(同)同連敏法師「つく〳〵舟まだともづなおもとのおくはさし〳〵出る物ゝ涙おりけり(夫)八憲盛「ともづなをとゝでいくゝはおりぬらんおゞゐの浦の五月雨のころ

ともつひと 友つ人(堀川)呼子公實鳥「ともつ人ありでゝへりぬよぶこ鳥おをよびゝへせ

あゞ名さのまん

ともね 共に寢る意也（千）冬親房「うさみよや上毛の霜をむらふらんともねのをしのもろ聲よおく（夫）廿七小陵鳥「ともねしてむぐゝこゑむこがらめの思ふ人だよあるよありけり

（同）十七俊成「こやの池のあしのうれむの草ぶきやともねのをしのをみうなるらん

補 **ともね孫** 納音（堀川次）賜弓「春さればかさ矢たもさみともねうちわゞかへゆみのうだぞ重なる（同）「引むあつさつうの弓の矢をむやこともねよまとのありうむだうあ（散木）注云ともねゝ鞆の聲といふ也まゝきの弓いるよゝ手よ鞆をかくる也（弁乳母）

「あづさ弓ともねもたえて夜もそうらかむ、あれさることをしぞおもふ

ともあふ 俗よいふ同伴の伴の字の意あり（玉）秋上西行「秋の夜をひとりやあきてあうさましともあふ虫のこゑあうりせば

ともあひて（續拾）冬中將よ侍りける時云々内より女房あまさともあひて法勝寺よまうり侍りけるついでよ

ともあへり（同）雜下ともあへりける女の身まうりよける時。道ッレのこならず何事ももろともよそるをいふ

ともあいる などもいふべし

○**ともあひ** 体の詞（源横笛）四此おあど所の御ともあひをことよをうしきふしもあきひどり詞あれど補（月詣）冬大炊御門右大臣家佐「ふれべちりちれば降うと聞ゆるゝ木の葉ともあふ時雨ありけり（好忠）「こそぎそるかもの川風ふくらしもすゞそよゆうん妹

そともあひ

とものこやつこ 伴の御奴。主殿寮伴氏の御奴也禁庭の掃除あどそる役者也よりてとのもりのとそへてもいへるあり見るべし。國造伴造といへるゝ別あり伴造の伴ゝ部よて牟禮をつゝ部よて牟禮をつゝ部よて牟禮をつ

風よみおとをいづるともふねハ高師の山のもみぢありけり（新六帖）三信實「とも舟ハつくしもいせもこきあひのおおどとまりようき寐をぞもする友千鳥おどの如くヒトツラヨ群ゲる意也

ともあらそひ 友爭（盛衰）四十一、十段さうろの所ヨ 各申けるハ此條互ヨ穩便あらば友あらそひ其せんあし平家のもきゝゝんもをこゲまし

ともし 照射（和名）四二（續捜神紀）云聶支少時家貧常照射見二白鹿射中ル之云々俗云照射止毛之（千載）夏顯綱「さつきやみしげきもやまよさつしゝハともしヨのこゞ人ヨおらるゝ

ともしをる （同）夏匡房（堀川）「ともしをるこやぎゲ原の下露ヨおのぶもぢぎりかこくよゞおき

ともをともし （拾玉）七「鹿ハいゝゝヨしづ心なく思ふらんともをともしハ野ヨも山ヨも。まヨたゞ

ともを火 ともいへり（千）夏顯季「五月やみさやまの峯ヨともを火ハ雲のさえまのほしゝとぞ見る

ともし 乏。物の足らず少きをいふ。（万）ヨよみさるもめづらしくあきたらぬ意あれど後ヨのとハ異也

ともしく （貫之）上廿五「川邊おる花をし見れバこおそこの影もともしくおりぬべらおり

ともしき （源常夏）四「いとともしきヨさやうならん物のくさハひ見いでまゝしけをど

ともしからば （盛衰）四十二四段ヨゲ君の御恩ヨてこゝろきより衣食ヨともしゝらば

ともしさ などもいふべし

補（万）八廿三「ほとゝぎを聲きく小野の秋風ヨもれさきぬれや聲のともしき（同）三卅五「こしの海れさゆひのうらをさびヨしてこれバともしみやまとしぬびつ（同）五木人「まつら川玉島の浦ヨわゝゆつる妹らを見らん人のともしさ（同）一廿四「あさもよしきびとそともしもまつち山ゆきくと見らむきびと、もしも（同）十七、云々四十人ヨもつ、けむともしぶるゲね（同）同廿七「山ふきのおげをとひく、鶯の聲を聞らん君ハともしもし（同）同卅三モアリ（同）十八、云々卅四秋ヨしあらねハこと、ひのともしきこら（古事記）ともしきろゝも（傳）四十一、卅九說あり

ともしづま 乏孀。織女をいふ（八雲）三上たなバさの下ヨ見ゆ（万）十廿五「やちぞこの是もめづらしくあきたらぬ思ふ意也とぞ神の御代より乏孀人知りヨなりつきてし思へバ（夫）十顯朝「天の川くらしゝねさるともしつまわさりをいそぐぬさをむくおり

ともしけち 經文の如ニ灯滅ニの意にて命の消るをいふとぞ（伊勢物）卅九段ともしけちおんぎる云々「いで、いおばかぎりおるべをともしけちとしへぬるゝとなく聲をきけかの至ケへし「いとあもれおくぞ聞ゆるともしけちきゆるものともわれハしらぎお（新後拾）夏、式子内親王「水くらき岩間ヨまよふ夏虫のともしけさでも夜をあらばゝお

ともしび 燈燭（和名）十二九四聲字苑云嚣照日燈竪燒日燭和名並毛師比度（万）十一廿六「灯のかげトモシヒまかゝよふうつ蟬の妹げゐめりしおもゝげヨ見ゆ（同）十八十八「等毛之火の光りヨミ

ゆるさゆりもあゆりもあいんと思ひそめてき（源薄雲）十五　ともしびあどのきえいるやうに　ともしびのもと（拾）雑春　清慎公の家のさふらひにともしびのもとに櫻の花ををりてさして侍りけるを云々　夜のともしび（夫）十三、千五百番、後京極　「ともあくて草葉にやどる秋の野の不（に）さるをりやよるのともしび　佛の御ともしび（源總角）十一　皆よりふして佛の御ともしびもかゝぐる人あしゝ（大方ハさゞひ又佛神れハ御あのしといへり）（万）十五十一　いさりをるあまの等毛之備（同）十一卅七　あまの燭火（トモシビ）是ちハ漁火也後ハハいさり火又ハゞり火あどず。松あるひハ（ひなどいいへり）（蜻蛉日記）中中廿二　おもしまれ〳〵といひつゝ云々木間（コヽ）よりひふさともしび三ともし見えさりなどゆ　補（宇治拾）四　火ともし給へといへばうれしくの給さりとて火ともしつ

ともを（伊勢物）卅九段　此不さるのともを火にやそゆらん（新六帖）二光後　「とのもりは　よるのそゆきにともを火のあきらけき世とおりにける哉　ともしさる（源帚木）卅五　火ともしさるをきのげ云々　ともしつくる（源末つむ）廿三　風ふきあれておのとあおらきえにけるをともしつくる人もあし（かけろふ日記）上四下　火ともしつけよいとくらしともさぬ（枕）十六　くらうおりてまさ火ともさぬをどに云々　ともせる（万）十九廿九　「おびつくとあまの燭（トモセル）有いさり火の云々（源かゝりび）三　おまへのかゞりびのをこしきえゞさあるを御供ある右近のさいふをめしてともしつけさせ給ふ云々　さえば人さふらひてともしつけよ灯にも燭にも動かしいへる詞同　ともぎり友摺（新六帖）六信實　「吹をぐる葉風にさても荻原やなをともぎりの音のをけしさ（夫）十一さびしさ　補（頼政集）「おく山の杉のともぎり我あれやさゞ戀ゆゑに身をこゞをり（沙石集）「おく山の杉れむら立ともそれがおのゞ身よりを火をいさしけるこの友摺を兼さり　ともそれば　ヤヽモスレバ、ヤヽトモスレバ、マタシテモなどの意なり（後撰）一戀　「思ふといふ物ゝらにともそれば忘るゝ草の花にやゝあらぬ（同）同　「ともそれば玉にくらべしまそゝみ人のさのらとそるぞかしき（六帖）二　「秋の野ゝ道もゆゝれにともそれば花のあさにに目のことまりて（拾）春（能宣）七　「ともそれば風のよるにぞ青柳のいとゝ中くみだれそめける（小大君）十五　「草のもにあらぬ世なれどともすれば露ゝさゞ身のうへゝとぞ見る（源さゝき）廿一　此にくき御心のやまぬにともそれば御むすをつぶし給ひつゝ（同紅葉賀）卅　さてその、ちゝとともそれば　ことのついでことにいひむゝふるくさゝひおるを（同紅梅）八　ともそれば御前の御あそびにめし出らるゝかさもらいさしや（同こてふ）十一　ともそれば　さり給ひつゝ（拾）雑戀　「風もやみ岑のくもものとも

すれバあやりやそき人の心ゝ補（後拾）雑三増基法師「とゝもそれバよゝの山べよあくがれ〜て、ろよ身をもまゝせつるゝかな（續千）釋教前大僧正範憲「いゝゞ〜てひゝりそへまし〜とゝもそれバきえあんとそる法のとゝも〜火（新千）冬相摸「とゝもそれバゝきくもりつゝ神無月かゞぞ〜ぐれのひまかゝりけゝる（源若菜下三十）尼君もやゝもそれバさへぬよろこびのかゝさともそれバおちつゝ、

とせ年　いくとせ　幾年、かど年をゝぞふるよゝみる　とせ　といいくと〜こゝいむず但いくと〜月といへゝり　い　の部をゝ

もゝとせ百年　ひとゝせ一年（伊勢物）六十三段「もゝとせよひとゝせさらぬつくもがみわきをてふら〜おゝゝげよ見ゆ　三とせ　四とせ（神代紀）上ナルマデニミトセニ九雖已三歲脚猶不立（枕）五二ゝとせよとせをゝりのかゞよ　五とせ（万）五ノ廿六「あまさゞるひかよ伊都等世をまひつゝ、都のてぶりをすらえよけり　七とせ（源帚木）廿四かゝゝとせあまりのかゞよ　十とせ（枕）三十と、せバゝり云々　むゝとせ二十年（源玉かつら）廿むゝとせバゝり云々　千とせ

いかとせ五百年　むとせ六年など（八雲）よ見ゆ　こゝのとせ九年　よそとせ四十年（後撰）雑一、贈太政大臣「今までよかゞどゝい花のさゝゆ〜てよそとせあまりとゝぎりいをる

○とゝのゝとせ年の三年（伊勢物）廿四段「あら玉のとゝのゝとせを待ひてさゞこよひこそまひ枕をれ此さゞひ上へもと玄のとそへたるいあまさ年のかゞをいむんとて年のかゞトイフハ長キ物ナルヲ三年四年タヽンモ又八

年ニナリシモ長キ事ヨとの意也　とゝの四とせ　とゝの五とせ　とゝの八とせ（續古）別み「ひと日さよこねバ戀〜き君ゲいかゞバとゝのよせとをいゝでくらさん是は國司の任限四年なるをいへる也（万）十八廿九長哥等之能五年（同）十六廿五年之八歲をまてど來まさぎ

○ひとゝせ是いそぎ〜年をいふ前のひとゝせと異あり。過し日をひとひといへるよ同（源桐つぼ）廿九ひとゝせの春宮の御元服南殿よてあり〜ぎ〜きのよそかゞ〜ゝり〜御ひゞきよおとさせ給いぎ猶

ひ　の部よも出す

とすれいゝり　とゝく　の所ゝ出そ

とすらん　いかゝやいゝにならんとそらんのさゞひ也てよをはの　と　の所に附そ　補此詞の例い玉緒補遺（後拾）「ちとせへむやどの子日の松をこそよそのためし〜ひゝんとすらめ（同）「きのふけふかゞくもゝりのこゝちせバあそよわゞ身やあむゞとそらん（同）「世の中をいまいゝゝぎりとおもふよいきみこひ〜くやかゝらんとそらん（輔親）「うゝろめよ風のさゞかるもゞりぶねいづれの方よよらんとすらん（雅兼）「むゝ〜のゝをのをる、身の行末いけふこひ〜くやかゝらんとすらん（賴政）「山さくらたづねそるまよやどなるいい身をうらみてやちらむとすらん（同）「ちる花を風よおゞせてな〜といむゞおかゞ名ぞとやふゞむとそらん（散木）「我こゝろ花の梢よ旅ゐして身の行へをもゝらゞ

よすがら

土佐山田町立図書館
利用の手引
図書館利用者は次の事項を守られたく
一、図書館の書籍は閲覧のみ
一、図書館の書籍は閲覧のみ
一、図書館の書籍は閲覧のみ

E